

第2調査区 第1調査区の南に隣接する。基本層序は表土、旧耕土、床土の下、さらに若干の遺物を含む旧耕土状の土を、一層ないし二層挟んで遺構面となる明黄灰色粘土層となる。掘立柱建物址2棟、第1調査区のS D01の続きやピットなどを検出した。なお、調査区西側ではさらにこの下層において自然流路とみられる砂利層の堆積がみられる。

S B13 桁行2間以上×梁行2間の南北棟である。

S B14 2間×2間であるが、調査地外へ延びるため規模等は不明である。

S D01 第1調査区から延びるもので、さらに東へと続いている。

流路1 幅1.5mほどの砂の堆積で遺構面より切り込み、南北に流れる。若干の土器片を含む。

流路2 調査区西側に堆積する黄灰色シルト砂（遺構基盤層）のさらに下にある砂利層の堆積で、わずかながら縄文時代後期と考えられる土器片を含んでいる。



fig.214 第2調査区全景（南から）

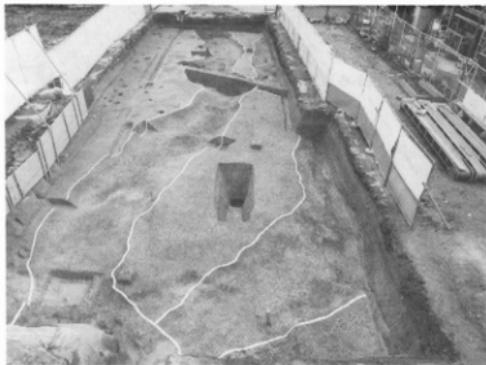


fig.215 下層の流路全景（北から）

3.まとめ

従来、調査区周辺は、遺物の散布は認められるものの明確な遺構面の広がりを確認することができなかった。今回の調査によりこの一帯において、集落址と考えられるかなり密な遺構の存在が明らかとなった。これらの遺構群は、おそらく北西から延びるやや安定した地盤の上を中心として10～14世紀代にかけて集落などが営まれたと考えられる。

18. 雲井遺跡 第4次調査

1. はじめに

雲井遺跡は神戸の中心地である三宮駅前の神戸市中央区雲井通・旭通に位置する。遺跡は六甲山系の南側の扇状地末端付近に営まれており、これまでに3回の発掘調査が行われて、縄文時代早期から弥生時代中期にかけての遺構・遺物が見つかっている。

今回の第4次調査は三宮東地区都市改造事業に伴って新設される道路部分で、幅4m、長さ60mについて調査を行った。



fig. 216

調査地点の位置

1 : 2500

2. 調査の概要

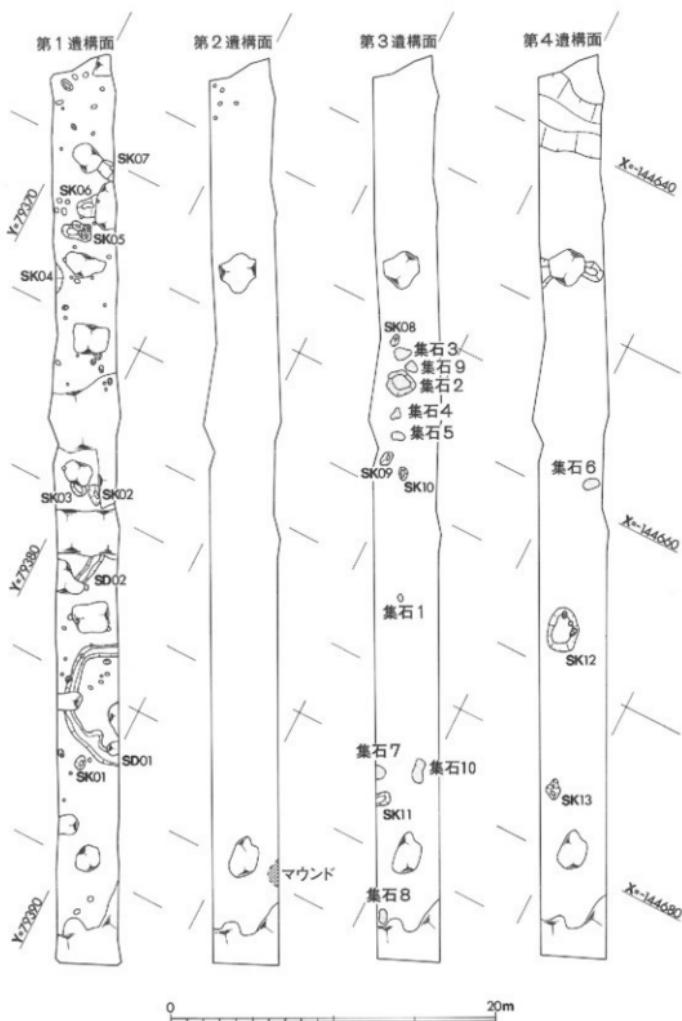
基本層序

調査地は北から南に向かって緩やかに傾斜している（標高13.4~14.9m）が、基本的にほぼ同じ堆積状況を示している。その層序は現在の地表面以下、近現代の盛土層（厚さ30~100cm）、明淡黄褐色砂（厚さ70~120cm、上面が第1遺構面）、黄褐色粘質シルト（厚さ10cm）、暗褐色粘質シルト（厚さ25cm、上面が第2遺構面）、灰褐色細砂（厚さ20cm、上面が第3遺構面）、黄褐色細砂（厚さ20cm、上面が第4遺構面）、淡黄褐色粗砂礫（厚さ180cm以上）である。

明淡黄褐色砂は一時の洪水による堆積で、今回の調査では遺物は出土しなかったが、調査地両側の側溝部分を調査した第3次調査では同層中より縄文時代中期の遺物が出土している。黄褐色粘質シルト～灰褐色細砂には縄文時代早期前半の遺物が多く含まれている。

黄褐色細砂以下は無遺物層で、淡黄褐色粗砂礫は土石流による堆積である。

fig. 217
調査区平面図



弥生時代前期 第1遺構面では弥生時代前期後半の遺構・遺物が検出された。遺構としては、土坑7基、溝2条、ピット約50基が見つかっている。

SK01~03 SK01・SK02・SK03は1.2×0.6m、深さ30cm程度の楕円形の土坑で、遺物は出土していない。

SK04 SK04は直径約2m、深さ40cmの円形または楕円形の土坑である。調査地外に拡がっているため、全体の形は確定できない。

- S K05** S K05は1.9×1.2m、深さ50cmの不整形の土坑である。土坑内に直径25cm程度のビットが4箇所掘られている。土坑内からは弥生土器片・サヌカイト片が出土している。
- S K06** S K06は1.8×1.2m、深さ40cmの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。
- S K07** S K07は2.0×1.1m、深さ60cmの楕円形の土坑である。調査地外に拡がっているため、全体の形は確定できない。
- S D01** S D01は幅60cm、深さ15cmの「コ」の字状に曲がる溝である。遺物は出土していない。



fig.218 第1遺構面全景（南から）

縄文時代早期 第2遺構面では調査地北端でビット5基と、調査地南端で人工的に土を盛り上げてつく
第2遺構面 ったマウンド状遺構が1基検出された。

マウンド状遺構は東側が調査地外に出ているため、全体の形状は確定できないが、直径
2.5～3m、高さ60cmの円錐形ものと考えられる。この遺構の性格は今のところ明らかで
ない。

第3遺構面 第3遺構面では、集石遺構8基、土坑4基が検出された。

集石1 集石1は灰褐色細砂上面に数個の拳大から子供の人頭大までの礫を置き並べている。

集石2 集石2は2.0×1.7mの楕円形で、深さは20cmである。この土坑中には直径5～25cm程度
の礫が数十個入っており、これらの礫の種類はほとんどが花崗岩である。

集石8 集石8は80×70cmの楕円形で、深さは20cmである。この集石遺構は、浅い土坑の底に、
直径25cm程度の礫を敷き並べ、その上に拳大の礫を重ねて置いてあった。

その他の集石遺構は、第3遺構面である灰褐色細砂上面では土坑のプランは確認できなか
ったが、灰褐色細砂層中に礫が集中した状態で検出されており、本来は、第3遺構面か
ら掘り込まれた小さな土坑中に拳大の礫を入れたものと考えられる。

第4遺構面 第4遺構面では、集石遺構1基、土坑2基、溝状の落ち込み2条が検出された。

集石6 集石6は黄褐色細砂の上面を若干掘り窪め、1.1×0.7mの楕円形の範囲に直径5～25cm
程度の礫を集めて置いている。

S K12 S K12は1.9×2.7m、深さ20cmの楕円形の土坑である。土坑内にビットが掘られている。
土坑中には若干礫が入れられている。



fig. 219 第3遺構面南半全景（北から）

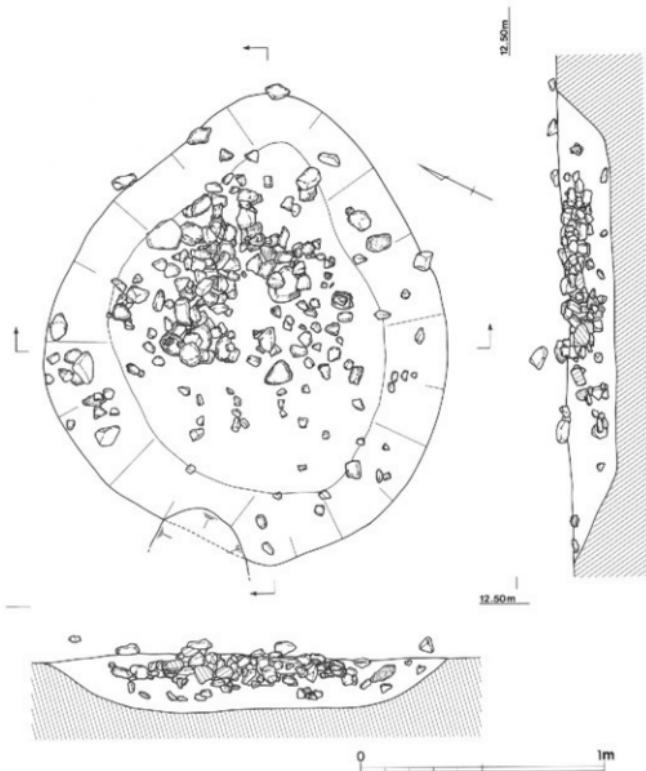


fig. 220
集石2実測図



fig. 221 集石 2 全景 (東から)

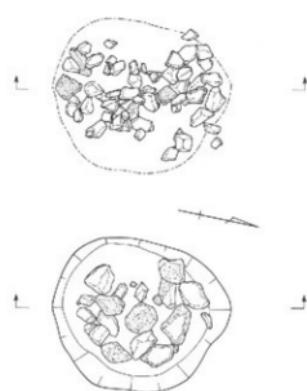


fig. 222 集石 8 実測図



fig. 223 集石 8 第1面 (東から)



fig. 224 集石 8 第2面 (東から)



fig. 226 SK 12全景（東から）

fig. 225 SK 12実測図

溝状の落ち込み 2 条はどちらも調査区の北端を東西方向に横切っているが、人工的なものか、自然のものかは判断できない。

以上のように今回の調査では縄文時代早期前半の集石遺構が 10 基確認された。その形状は、土坑中に拳大を中心とした礫を入れたものと、礫を平坦地に置き並べた 2 形態がある。いずれにも焼けた痕跡と考えられる赤色化した石や黒ずんだ石が見られる。

これらの集石遺構の用途等の断定は難しいが、炉または焼いた石を集めた調理場、もしくは墓と考えられる。

遺物

弥生時代の遺物は、第 1 遺構面直上で甕の底部と、SK 05 から頸部に範描沈線 2 条以上の入った甕の口縁部など弥生土器数点と、SK 05 からサヌカイト片 1 点が出土したのみである。これらの遺物はすべて弥生時代前期後半のものと考えられる。

縄文時代の遺物は未整理の段階なので詳細は明らかではない。黄褐色粘質シルト～灰褐色細砂層中には、山形紋・ネガティブな梢円紋・舟形沈紋・格子目紋・市松紋等の押型紋土器が多数出土している。これらは大川式や神宮寺式と呼ばれる縄文時代早期前半の土器である。

また、同層中からは、サヌカイト製の石鏃・石錐・搔器・削器・尖頭器状石器・楔形石器、チャート製の石鏃や磨石等の石製品も多数出土している。さらに、これらの石製品の他に人為的に持ち込まれた撒入礫が数千個出土した。その形状は直径数 cm～25 cm ぐらいまでの大きさのものがほとんどで、石材は花崗岩が 9 割以上を占める。また、焼石も多く含まれているが、その用途は明らかでない。

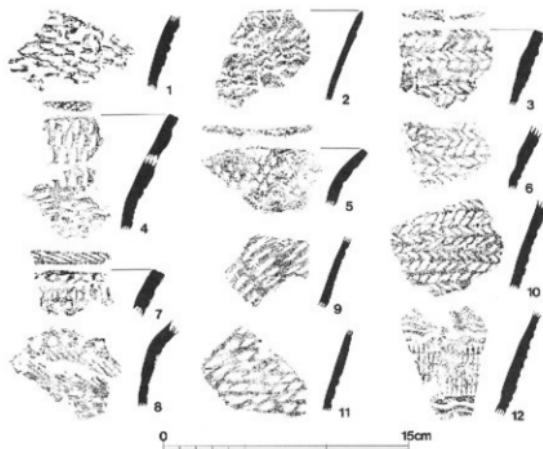


fig. 227 縄文時代早期の土器
実測図

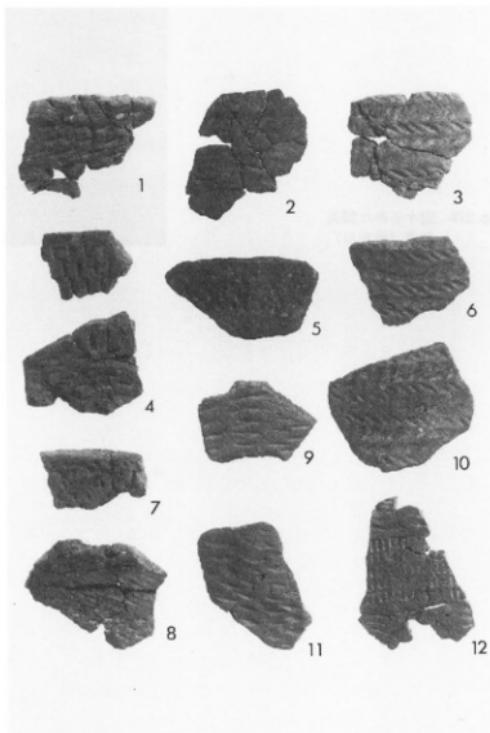


fig. 228 縄文時代早期の土器
(楠華堂撮影)

3.まとめ

以上のように、今回の調査では弥生時代前期と、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。弥生時代前期の遺構は第1次調査でも見つかっており、この時期の遺跡の拡がりが確認された。しかし、前回の調査にくらべて、遺構・遺物は少なく、遺跡の中心からは離れていると考えられる。

今回の調査での最大の成果は、縄文時代早期前半の大川式・神宮寺式の遺構・遺物が確認されたことである。これらは神戸市内最古の土器であり、この時期のものは神戸市内はもとより阪神地域では初めての発見で、近畿地方でも数少なく、この時代の社会を知るうえでの貴重な資料となる。今後、遺物の整理が進めばより明確なデータが得られるであろう。



fig.229 空からみた調査
地点（北から）

19. 旧三宮駅構内遺跡 第2次調査 (V・VI区)

1. はじめに

周辺部は古くから市街地として開発が進んでいたところであり、当該地も明治14年の神戸区地図および地籍図から見ても早くから外国人居留地ないしは役場として利用されていたようである。そして、明治17年に神戸小学校が建設され現在に至っている。

明治21年には東海道本線が開通し、三宮駅が建設された。この三宮駅は現在の元町駅周辺と考えられている。昭和3年に旧三宮駅が取り壇され、解体工事中に故福原潜次郎氏が弥生土器を採集し、弥生時代の遺跡が存在することを明らかにした。

旧三宮駅構内遺跡にかかわる発掘調査は、神戸小学校と神戸中学校・摩耶兵庫高校の跡地に予定されている神戸生田中学校の建設計画に伴う事前調査として行ったものである。調査は平成元年度から総面積4500m²におよんでいる。

平成2年4月からの本調査では発掘の総面積を4000m²として開始した。この調査は旧神戸小学校および摩耶兵庫高校・旧神戸中学校の校舎解体工事と並行して行う関係から4回に分けて実施することとなり、それぞれ1次I区調査、1次II区調査、1次III区調査、1次IV区調査と名づけた。ただし、摩耶兵庫高校・旧神戸中学校の東西校舎は、摩耶兵庫高校校舎としてしばらく存続するため、引き続いての調査は見送られることとなった。平成3年7月に神戸中学校建設工事に伴い摩耶兵庫高校の運動場部分を調査する必要が生じ、先年度に引き続き調査を行った。この調査は先年度の調査との兼ね合いから2次V区調査、2次VI区調査とした。



fig.230
調査地点の位置
1:2500

2. 調査の概要　調査区は学校敷地内であり、隨所に著しい削平を受けている。遺構検出面は、標高14.3～15.0mで東南へ低くなる。基本的に暗黒褐色の地山で、砂質のところが多い。ほぼ全域が後世の削平を受け、14～15世紀（室町時代）の地表面は残っておらず、大部分の遺構は同一面で検出された。遺構の時期区分は遺構の重複や配置関係、出土遺物の年代などを手掛かりに決定した。なお、V区は削平が著しく遺構・遺物は確認できていない。

奈良時代の遺構　VI区西半に位置する東西2間（3.0m）、南北2間（3.2m）の東西棟である。桁行（東西）方向の柱間は5尺、梁間は約6尺である。柱穴は一辺60～80cmの方形である。柱掘方の埋土からは奈良時代中期の土器が出土した。

室町時代の遺構　調査区東端に位置する南北溝である。一部途切れるものの発掘区の北から南へ貫通している。北では溝幅50cm、深さ30cm、南では幅広くなり、溝幅1m、深さ50cmである。

S B 301

S D 102

遺物

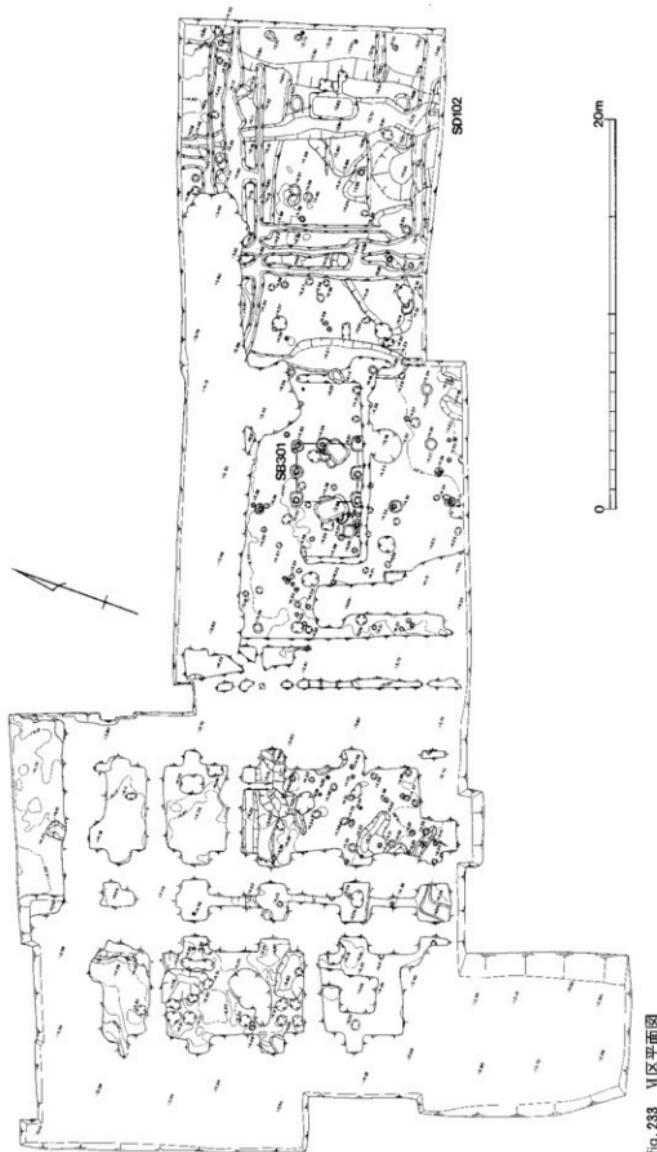
今回の調査で出土した遺物には、弥生時代～室町時代の土器がある。弥生土器、土簡器、



fig. 231 VI区西半全景（北から）



fig. 232 VI区東半全景（北から）



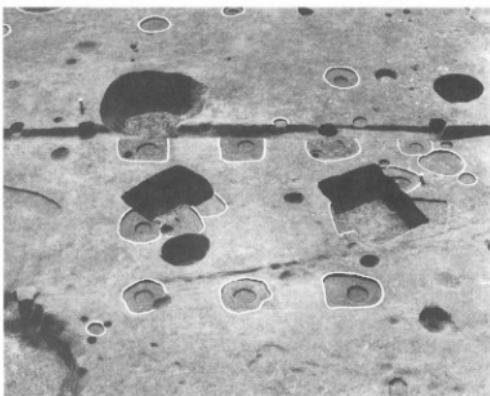


fig. 234 S B 301全景（北から）

須恵器のほかに、瓦器、陶器、磁器や土鍾などの特殊土製品がある。土器は建物、溝、土坑などの遺構や部分的に残存した砂質土などの各時代の遺物包含層から出土している。遺構出土の土器のうち量的に多いものは溝出土の土器で、土坑出土のものがそれに次ぎ、建物出土の土器は少量である。

3. まとめ

今回の調査において、古くから遺跡の存在が明らかにされながら実態が不明であった旧三宮駅構内遺跡についてその一端を今回の調査によって明らかにすることができた。

まず、旧三宮駅構内遺跡は、繩文時代から安土・桃山時代にいたる複合遺跡である。本来、弥生時代から古墳時代にかけての集落が周辺部に存在していたと思われるが、後世の削平を受けており、今回の調査では明らかにできなかった。

神戸市内でもあまり出土例のない須恵器の佐波理窯をはじめとする奈良時代の土器群が出土し、奈良時代の建物も確認された。これらのことから、官衙的な性格を帯びた施設に付随するものである可能性もあり、西国街道の要所でもあり、注目されるところである。奈良時代以後、11世紀中頃、12世紀代の遺構・遺物は存在するが、あまり明確ではない。14世紀後半からは井戸をはじめ、土坑、ピット群など、明らかに村落の存在を匂わすものが多数出土している。また、包含層からではあるが、この時期のものと思われる堀が出土しており、何らかの生産と関わりも持っていた可能性がある。しかし、15世紀の後半には周辺は水田もしくは畑に変わっていく。

16世紀後半には周辺に花隈城と侍町・足軽町が築かれたとされているが、今回の調査では遺構はおろか遺物さえも確認できなかった。絵図によると、城はほぼその辺を東西南北に向いているが、侍町・足軽町は城に対して30度ほど長辺を北にふっている。現状の地形からも現在の兵庫県公館に通じる南北の道を境に北西から南東へと傾斜が変化している。この北西から南東へと傾斜が変化している面を階段状に削平し、侍町・足軽町を形成していた可能性がある。調査においても北西から南東への急激な傾斜を確認しており、上記のことからも、調査区内に侍町・足軽町の縁辺が築かれていた可能性は依然残るわけであるが、削平が著しく、可能性の指摘に止めたい。

20. 日暮遺跡 第4次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、昭和61年の試掘調査によって、その存在が確認された遺跡で、扇状地末端から低位段丘面に立地している。昭和61年市営日暮住宅建設に先立つて実施した発掘調査では、古墳時代の堅穴住居址や平安時代の掘立柱建物址が確認され、注目された（第1次調査地点）。

この後、マンション建設に伴って2回の発掘調査が実施され、隣接する第3次調査地点では古墳時代前期の堅穴住居などの遺構が確認されている。今回調査を実施した第4次調査地点は平成3年9月5日に行った試掘調査によって明らかとなったもので、第3次調査地点の東北東約200mに位置する。マンション建設に先立つもので、当該の敷地ほぼ全面の約350m²について発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

発掘調査は敷地ほぼ全域を対象としていたため、仮設事務所用地確保のため、便宜的に北半と南半に分割して行い、残土は盛土の部分のみ場外搬出した。

発掘調査の結果、弥生時代末～古墳時代前期および平安時代前期の旧地表面と鎌倉時代前期の旧地表面がそれぞれ確認できた。両遺構面ともに緩やかに北西から南東に向かって傾斜している。

〔弥生時代後期末～古墳時代前半期・平安時代前期の遺構と遺物（第2遺構面）〕

黒褐色シルト質極細砂～褐色シルト混じり細砂を基盤層とする遺構面で、堅穴住居址3棟、溝2条、集石遺構1基、土坑8基、ピット31基（うち6基が平安時代）を確認した。

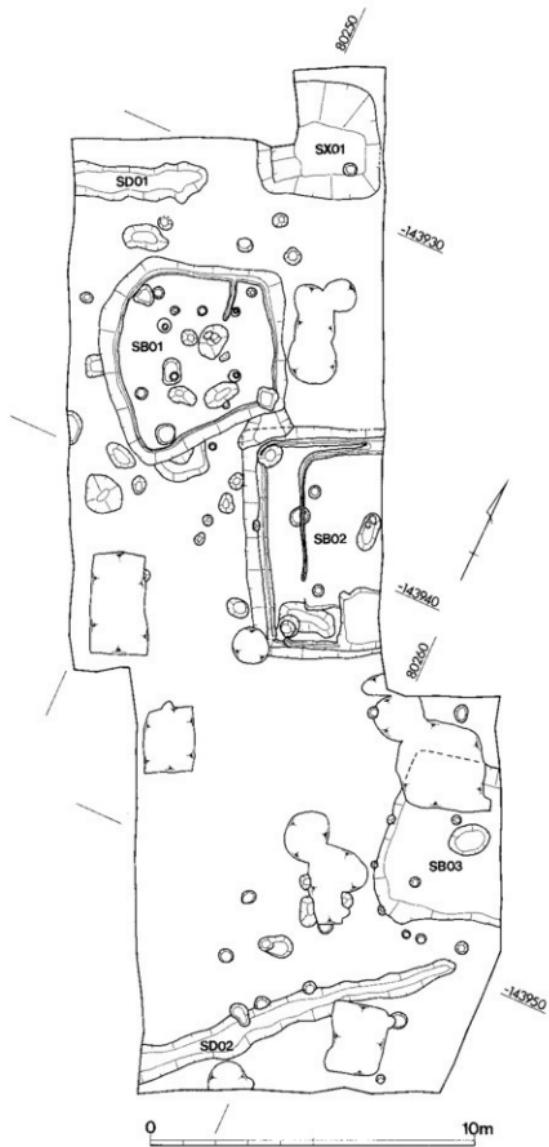


fig. 236 第2遺構面平面図

S B 01

今回の調査で唯一全容の判明した堅穴住居址である。南北長6.4m、東西長6.0m、周壁最大高約50cmで、平面形態は西側周壁が緩やかに円弧を描くため、歪な方形である。床面には梢円形の中央土坑1基、主柱穴4基、ピット10基、完周する幅20cm前後の周壁溝がある。主柱穴はいずれも直径約20cmの柱痕が検出されたが、P1が深さ40cmを測るほかは、概して10cm前後のものである。

床面からは、中央土坑の東側に接して台石が、東側周壁沿いで土師器高壙が出土している。出土遺物から、弥生時代後期末に営まれたと考えられる。

また、堅穴住居の埋土からは、かなり多量の土師器が出土したが、在地産の土師器に混じって、東部瀬戸内地域や山陰地域から搬入された土師器甕などが出土している。



fig. 237 S B 01実測図



fig. 238 S B 01全景（東から）



fig. 239 S B01とS X01（南から）



fig. 240 S B01床面上器検出状況（北西から）

S B02

調査対象地区のほぼ中央で確認した、南北長7.15m、東西確認長4.3mのやや大型の方形の堅穴住居址で、東半は調査区外に延びる。壁高は最大で約40cmである。床面の中央には椭円形の浅い中央土坑がある。主柱穴は2個確認できたが、両者とも直径約30cm、深さ45cmで柱痕は確認できなかった。北西隅と南西隅には、直径約70cmの土坑があり、土坑1では土師器小型器台が、土坑2では土師器小型丸底壺が出土している。また、周壁溝は完周するものと考えられるが、幅約1mのベッド状遺構は西壁沿いでのみ確認できた。出土遺物から、古墳時代前期初めに營まれたと考えられる。

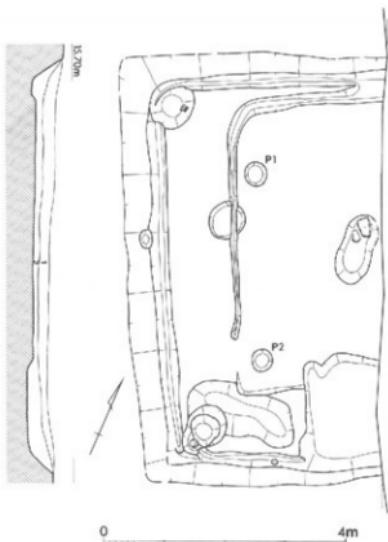


fig. 242 S B02全景（南から）

fig. 241 S B02実測図

S B 03

南北長4.5~5.0m、東西確認長4.3m、周壁最大高約45cmの方形の竪穴住居址で、北西隅は搅乱によって削平され、東半は調査区外にある。床面には梢円形の浅い中央土坑1基とピットが2基確認できたが、主柱穴と考えられるものはない。また、周壁溝は確認できなかった。

床面から、土師器碗3・小型丸底壺3・高坏2が出土しており、古墳時代中期前半に営まれたと考えられる。

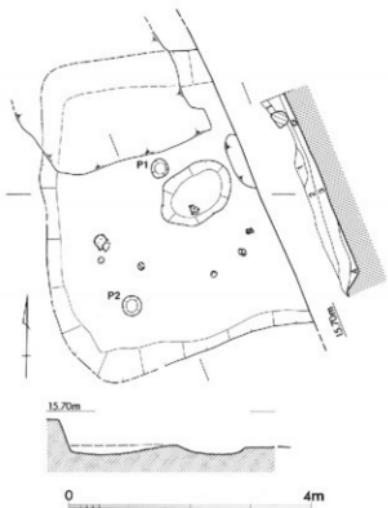


fig. 244 S B 03 全景 (南から)

fig. 243 S B 03 実測図

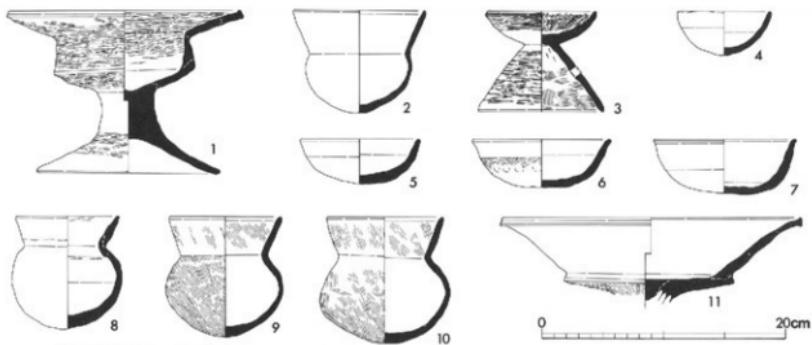


fig. 245 竪穴住居址出土土器実測図

1
2~4
5~11
S B 01
S B 02
S B 03

S X01 調査区の北辺で確認した集石遺構である。一辺約4m、深さ約1mの方形の土坑で、拳大～人頭大の花崗岩で一気に埋められたものである。出土遺物には土師器の小片がある程度で、遺構の性格や詳細な時期については不明である。

S P 12～17 S B01の西側から北側にかけて確認できた直径50cm前後、深さ20cm前後のピットである。掘立柱建物や柵列を構成するには到らないが、埋土の状況や出土遺物などから平安時代前期の遺構と考えている。また、埋土の状況からみて、S D01も同時期の遺構と考えられる。



fig. 246 S X01完掘状況（南から）



fig. 247 S X01埋没状況

〔平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構と遺物（第1遺構面）〕

遺構は南半部のみで確認され、溝状遺構3基、土坑1基、ピット9基が検出された。

S X03～05 溝状遺構はそれぞれ幅1m前後、深さ30～40cmで、似かよった形状である。ほぼ直線的に並んでいるものの、幅約1mの陸橋部が認められるもので、その性格については不明である。埋土から須恵器・土師器が出土している。

S K08 土坑は直径2m、深さ2mのもので、中層から半身大の花崗岩礫が出土している。基盤層である砂疊層を掘り込んでいたため、本来は素掘りの井戸であった可能性が指摘できるが、現在は湧水が認められない。出土遺物には平安時代後期の須恵器・土師器がある。

ピット 直径15～20cmのものが大半で、掘立柱建物や柵列を構成するには至らない。

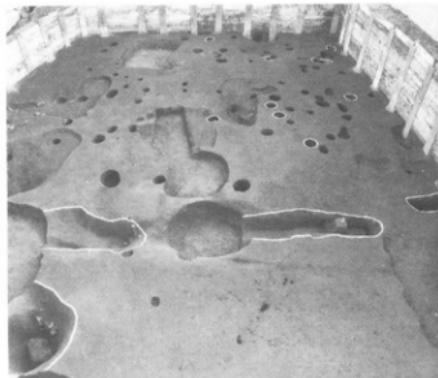


fig. 248 南半区第Ⅰ遺構面
全景（北から）

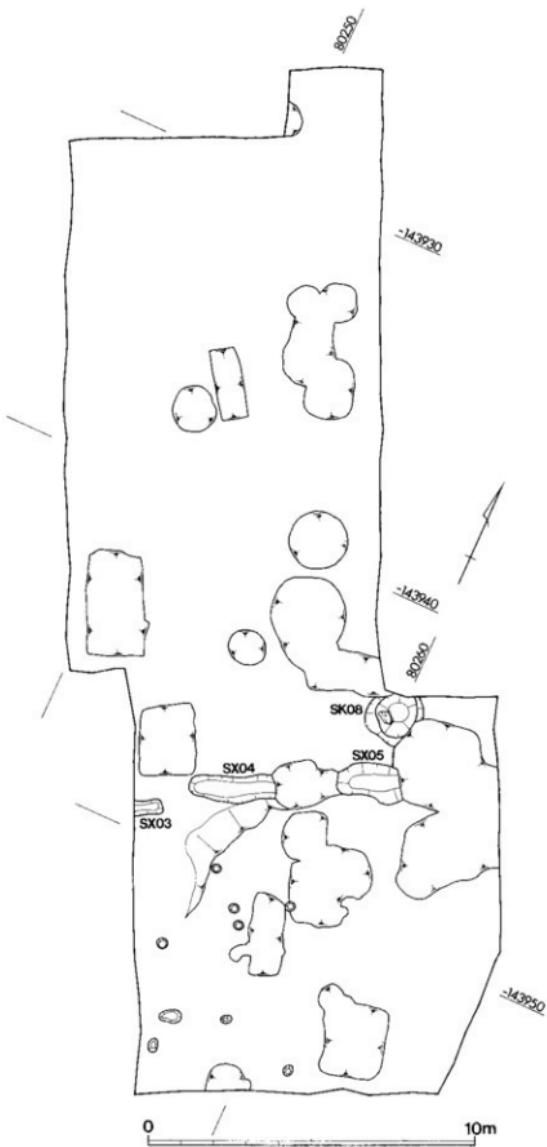


fig. 249 第1遺構面平面図



fig. 250 SK 08全景
(南から)

3.まとめ

以上のように、今回の調査では、弥生時代末～古墳時代前期・平安時代前期の遺構面と平安時代後期～鎌倉時代の遺構面が検出でき、豊富な遺構・遺物が確認できた。

今回検出できた堅穴住居址3棟は、北西から南東に順次時期を追って営まれていることから、これまでの調査成果ともあわせて継続的な集落の形成が推定できる。そして、この3棟の堅穴住居址が並んでいる部分が当該期の微高地を形成していることが推定できる。また、S B01の埋土から出土した多量の土師器は、在地産の土師器に混じって、東部瀬戸内地域や山陰地域の土師器甕などが搬入されていることは、集落の性格を考えていく上で重要である。

平安時代から鎌倉時代の遺構では、今回の限られた調査対象区内でも、遺構検出地点に時期的なまとまりが指摘できる。集落形成の細かい移り変わりを示しているのであろう。

21. 八幡遺跡

1. はじめに

八幡遺跡は、石屋川と都賀川にはさまれて南に延びる丘陵扇状地上に立地している。周辺の遺跡としては縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である猿原遺跡、多数の銅鐸・銅戈が出土した桜ヶ丘遺跡、弥生時代の高地性集落が検出された伯母野山遺跡、弥生時代と平安時代の遺跡である滝ノ奥遺跡が存在している。

当遺跡は、住宅建設の際の試掘調査で発見された遺跡で、平成2年度に妙見山麓遺跡調査会が調査を実施し、古墳時代の堅穴住居址、平安時代前半の掘立柱建物址、室町時代後期の土坑群などを検出している。今回の調査も住宅建設に伴うもので、試掘調査の結果、遺物が出土したため、工事により文化財が影響を受ける範囲について調査を実施した。



fig. 251
調査地点の位置
1:2500

2. 調査の概要

調査地は標高約50m付近に立地する。調査地の基本土層は、1. 盛土 2. 灰褐色砂質土 3. 茶褐色砂質土 4. 暗茶褐色砂質土 5. 黒褐色粘質土 6. 茶褐色疊混じり砂質土（地山）となっている。各層は北から南に緩やかに傾斜しながら堆積している。このうち、2～5層の各層に遺物が含まれており、中でも5層には比較的多く遺物が含まれている。調査は、盛土を重機を使用して除去した後、人力で包含層を掘削し、遺構検出を行った。遺構は、6層上面で掘立柱建物址5棟を含む多数のビット、不整形の落ち込みなどを検出した。なお、調査区の北半部は削平を受け、盛土を除去すると地山が検出され、遺構の遺存状態も良くなかった。

SB01

東西2間(4.0m)×南北2間(3.9m)の掘立柱建物址である。

SB02

東西2間(4.2m)の掘立柱建物址であるが、北側が削平を受けているため南北の規模は不明である。

SB03

東西2間(3.2m)×南北1間(2.0m)の掘立柱建物址である。

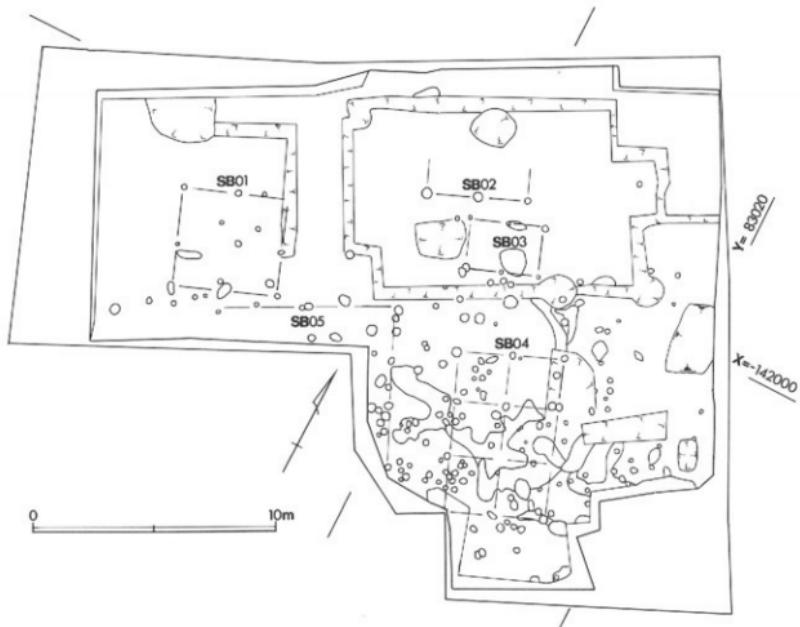


fig. 252 調査区平面図



fig. 253 調査区北半全景（西から）



fig. 254 調査区南半全景（北から）

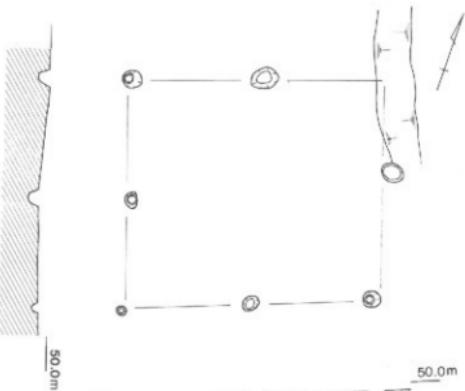


fig. 255 S B 01 実測図

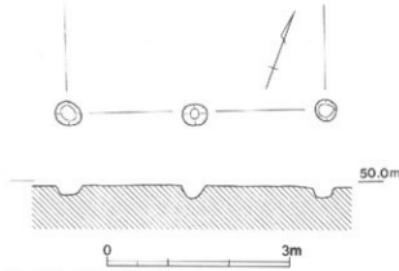


fig. 256 S B 02 実測図

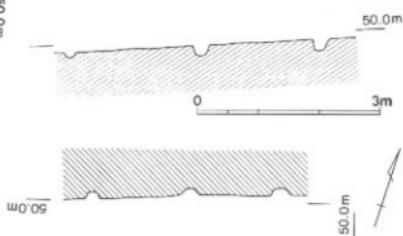


fig. 257 S B 03 実測図

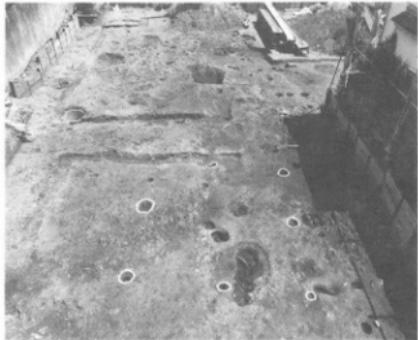
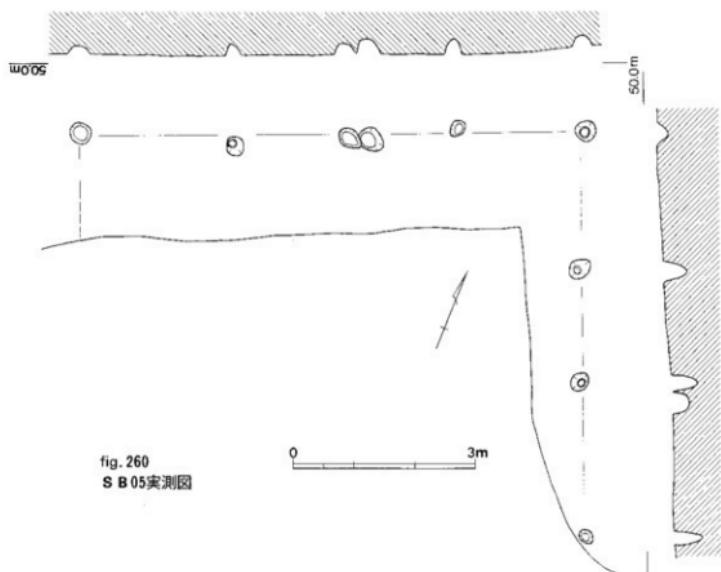
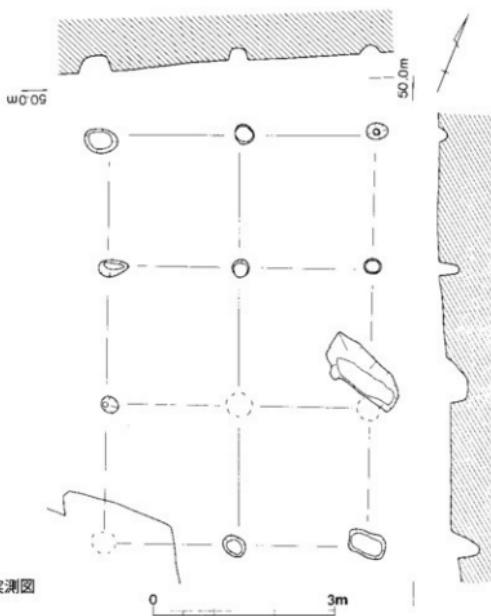


fig. 258 S B 01とS B 03 (西から)



S B 04 東西2間(4.4m)×南北3間(5.8m)の総柱の掘立柱建物址になると推定される。

S B 05 東西4間(8.3m)×南北3間(6.6m)以上の掘立柱建物址であると推定されるが、ほとんどが調査範囲外である。

出土遺物 掘立柱建物址のピット内からは、少量の瓦器片・須恵器片が出土している (fig. 261)。

1～5は瓦器碗である。4は底部に「十」の墨書きが認められる。6は須恵器碗、7は須恵器鉢である。これらの遺物の時期は、およそ12世紀末から13世紀前半に求められる。

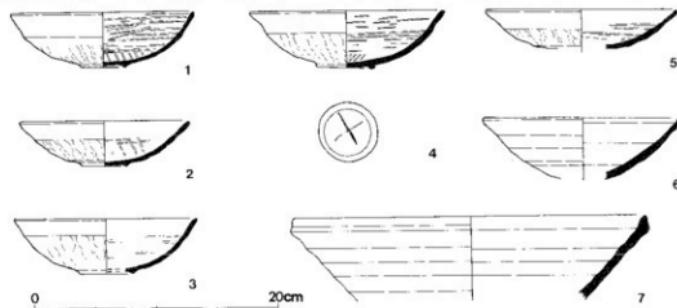


fig. 261
掘立柱建物址
ピット内の出土
遺物実測図

8～33は遺物包含層出土のもので、大半は黒褐色粘質土から出土しているが、17・23は茶褐色砂質土から出土している。8～13は土師器の小皿で、13のみ糸切り底その他の手づくりである。14は瓦器の小皿、15～17は瓦器碗、18～21は須恵器碗、22・23は須恵器鉢、31は須恵器碗の口縁部、32は土師器碗の口縁部である。なお、中国陶磁も細片が出土している。24～29は白磁で、30は龍泉窯系の青磁である。図化できなかったが、同安窯系の製品も出土している。33は石硯で、周囲と陸の端部に線刻が施されているあまり例を見ない。

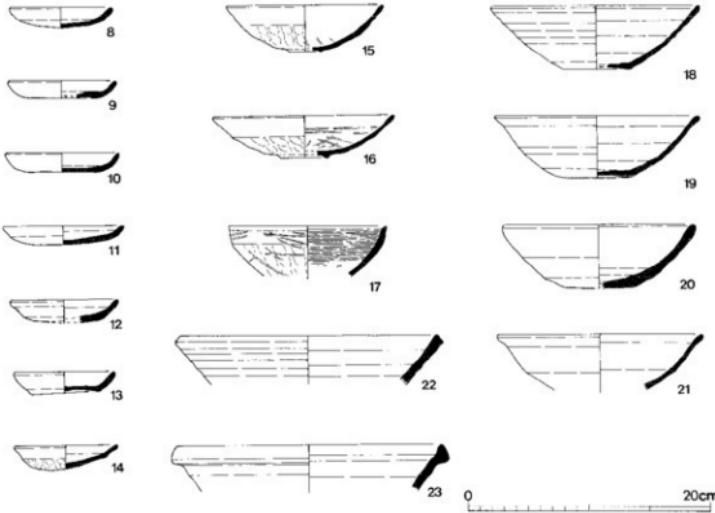


fig. 262
包含層の出
土遺物実測
図(i)

ものである。これらの遺物の時期も、17・23を除いて12世紀末から13世紀前半の範囲に収まるものである。茶褐色砂質土出土の17はやや遅るもので、23は14世紀代のものと考えられる。

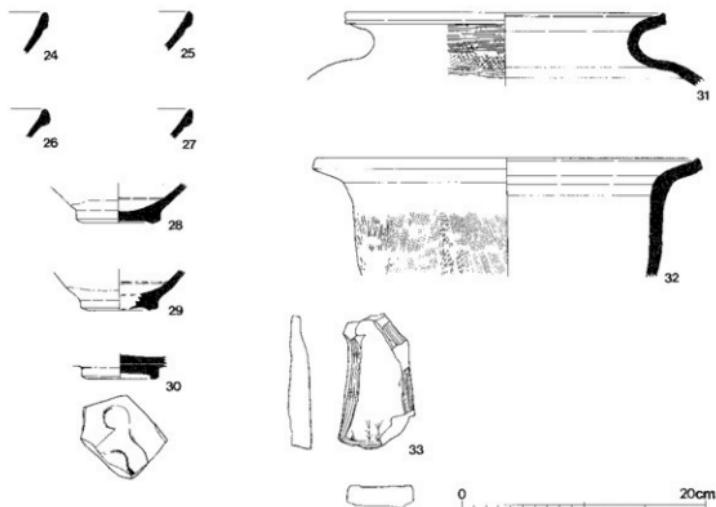


fig. 263
包含層の出
土遺物実測
図(2)

3.まとめ

今回の調査で検出された掘立柱建物址のうち、SB01～SB04は同一方向に配置されているが、SB05のみやや方向がずれている。建て替えが想定されるが、出土遺物からは明確な時期差は認められなかった。この建物群はSB05が母屋で、その他はこれに附属する建物ということができよう。当時の一般的な庶民の建物より規模が大きく、出土遺物に中国陶磁や珍しい形の硯が含まれていることから考えて、鎌倉時代前半の富裕な階級に属する人の建物であった可能性が高い。

22. 滝ノ奥遺跡

1. はじめに

滝ノ奥遺跡は、表六甲南麓の標高約140mの丘陵上に位置する。当地は、昭和39年12月に銅鐸14、銅戈7を出土した桜ヶ丘遺跡A地点と昭和53年度に弥生時代中期後半の住居址・壺棺等を検出した桜ヶ丘遺跡B地点との中間に位置する。桜ヶ丘遺跡B地点とは谷を挟んで別の丘陵となるが、A地点とは同一丘陵上に立地する。

この遺跡は当該地北側で、昭和56年度にマンション建設に先立って行われた発掘調査で確認された。この調査では10世紀代の掘立柱建物址2棟、12世紀中葉の経塚1基、13世紀代の礎石建物址1棟の他、室町時代と考えられる火葬墓14基が検出された。遺物は縄文時代早期の有茎尖頭器1、弥生土器、石鏃、平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、三彩系陶器、灰釉陶器、綠釉陶器や鎌倉時代から室町時代の土師器、須恵器、瓦器、中国製陶磁器、瓦、五輪塔、石仏等多様なものが出土している。

今回当地に、マンション建設工事の計画がおこり、昭和60年8月と昭和63年3月にトレント調査を行った。この結果、有茎尖頭器1、弥生土器、中世土師器、鉄製刀子や、火葬墓が検出された。これを受け、丘陵上を全面的に調査することとなり、平成元年度より調査を実施した。平成2年度の調査では、弥生時代中期後半の土坑や竪穴住居址、平安時代の土師器、黒色土器等が検出されている。

平成3年度の調査は、これを引き継ぎ4月1日より調査を開始した。



fig. 264
調査地点の
位置 1:5000

2. 調査の概要 今回の調査では、旧石器時代～室町時代に至る遺物・遺構が確認された。
- 〔旧石器時代〕 B-2-a区S T01・02のベース土中からナイフ形石器が1点出土した。この他、風化度の激しいサスカイト製のスクレイバーやクサビ形石器があるが、同時期のものか確定はできない。
- 〔縄文時代早期〕 B-2-c区東側斜面の北側で有茎尖頭器が1点出土した。地山である黄褐色砂礫土に一部くいこんだ状況で、先端を北に、一側辺を上にして出土した。有茎尖頭器は昭和56年度の第1次調査で1本、昭和60年度の試掘調査時でも1本出土してしおり、今回のものと合わせ計3本が検出されたことになる。
- また、同じ斜面からはサヌカイトやチャートの剥片・碎片と共に押型文土器の小片が出土した。さらに、関東地方に分布の中心を持つ燃糸文土器の胴部小片が出土した。
- これらの遺物は、斜面の流土中で検出されたもので、同層中には弥生土器の小片も含まれている状態である。





fig. 267
调查地区
遺構平面図

〔弥生時代〕 この時期の遺構としては竪穴住居址や土坑、土器溜まりなどが検出された。

S B01

S B01は7本の主柱と中央土坑を持つ直径約8mの円形竪穴住居址と判明した。住居址からは壺・甕・高杯などの多量の弥生土器と9点の鍵錐車が出土した。鉄ヤリガンナ（現長5.8cm）も1点出土した。

S K42

S B01の南側で検出した2.4m×2mの土坑で、弥生時代中期後半の土器片が出土した。

S K01~03

S K01・02は焼土塊、炭を含むもので、S K01上面から弥生土器が出土した。S K03は径約2mの円形土坑で弥生土器小片が出土した。

S D01

東西長約4mの「コ」字形の溝で弥生土器小片が出土した。



fig. 268
調査地区全景
(南から)



fig. 269
A区 S B01全景
(北西から)

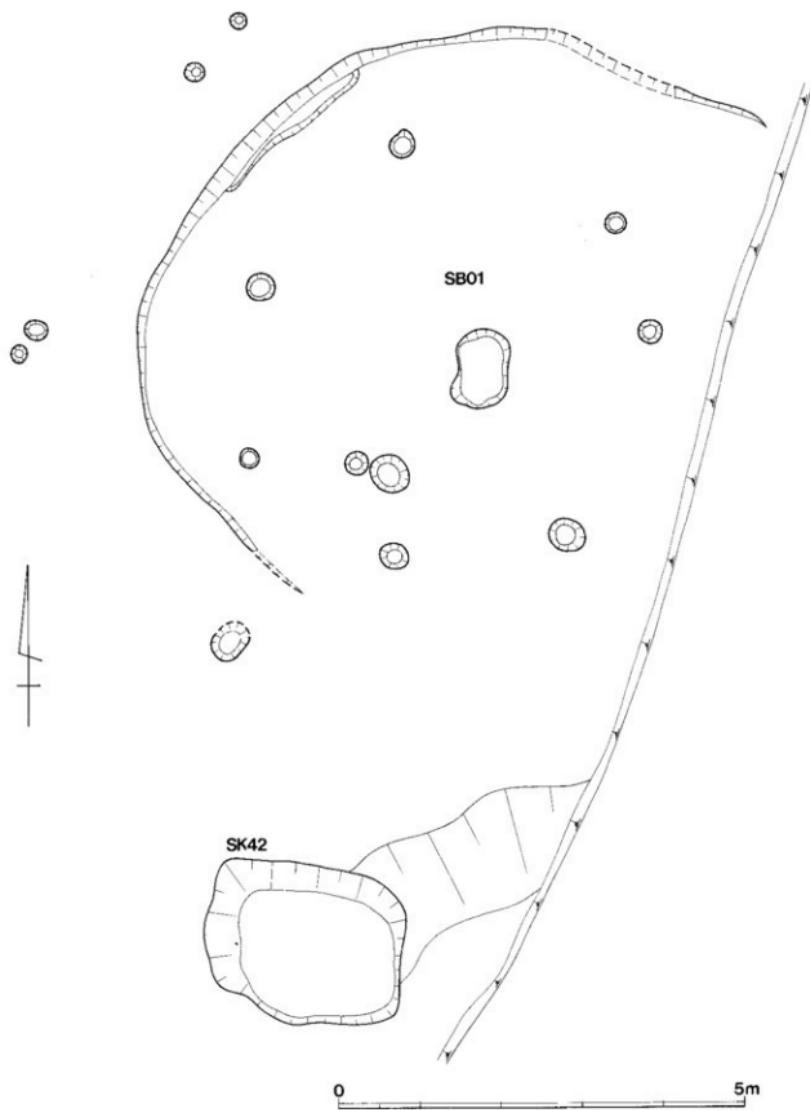


fig. 270 A区SB01・SK42平面図



fig. 271 SK02全景（南から）



fig. 272 SD01全景（南から）



fig. 273 C-b区土器群遺物出土状況
(西から)

C-b区土器群 C-b区からB-2-g区北端にかけて、弥生土器が集中して出土する箇所があった。ここからは完形のものを含む土器と共に磨製石剣2点、投弾1点が検出された。出土状態から短期間に破棄されたものと考えられたが、遺構に伴うものは明確でなかった。

〔歴史時代〕 ST01・02は昭和60年度のトレンチ調査で確認されていた火葬墓である。当時は幅の狭いトレンチということもあり、様相が明確でなかったが、今回の調査で南北に接する2基の火葬墓と判明した。

ST01 南側のST01は、東西1.4m、南北1.7m、深さ20cmの隅円長方形で、土坑底部には焼土があり、埋土中から炭、骨と共に土師器小皿、鍋小片、鉄釘が出土した。

ST02 ST02はST01の北東隅に接して設けられた火葬墓で、径1.0m、深さ20cmである。ST01と同じく土坑底部に焼土、埋土中から炭、骨、鉄釘が出土したが、土器は検出されなかった。ST01出土の土器は室町時代のもので、ST02もほぼ同時期のものと考えられる。

土坑群 C区からは計11基の土坑が検出された。いずれも黄褐色や黄茶灰色系の土を埋土とするものである。出土遺物は極めて少なく、かつ小片で時期を確定することは困難であるが、

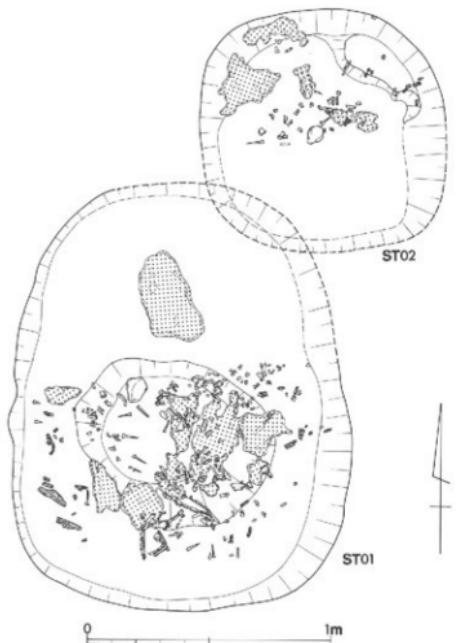


fig. 274 S T01・02平面図



fig. 275 S T01・02全景 (北から)

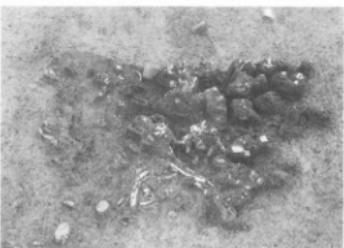


fig. 276 S T01炭と骨の出土状況 (南から)

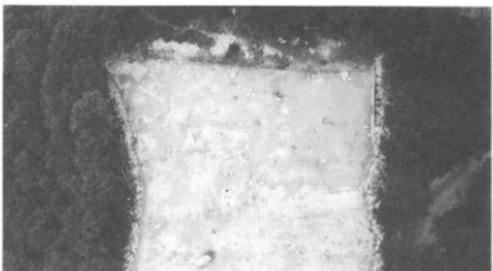


fig. 277 C区土坑群全景 (空中写真)

S K07から東播系須恵器碗と考えられる細片が出土し、鎌倉～室町時代のものと考えられる。昭和63年度の試掘時に出土した鉄刀子（長さ23cm）は、このS K07の西側付近からのものと考えられる。

C区の流土中からは、9世紀代の黒色土器・土師器や13世紀代の瓦器碗・小皿、15～16世紀代の土師器鍋が出土している。平安時代のものが大半で、緑釉陶器の細片も1点出土している。上記の土坑群の中には、この時期まで遡るもののが存在する可能性がある。

【時期不明遺様】 東西1.4m、南北2.5mの範囲の側辺に偏平な石を配列し、内部に拳大～人頭大の石を置く。これは、旧表土の上に置かれたもので、新しい時代のものと判断できるが、旧表土中に遺物がなく時期を決定できなかった。石の間からも遺物がなく、また下部にも遺構はなかった。

3. 遺物

fig. 278は今回出土した石器類である。

(fig. 278～282) 1は縦長のサムカイト剥片を素材として、二側辺の下部に連続した剥離を加えたナイフ形石器である。B面下端にはバルブと打面が残る。先端を欠失したが、現長4.2cmである。

2は台形のサムカイト剥片の下辺部片面に調整を加えたスクレイパーである。

3は全長7.2cm、最大幅3.0cmのサムカイト製有茎尖頭器である。A・B面とも左半は左下から、右半は右上から押圧剥離を加える。基部は低い逆三角形の小型のものである。

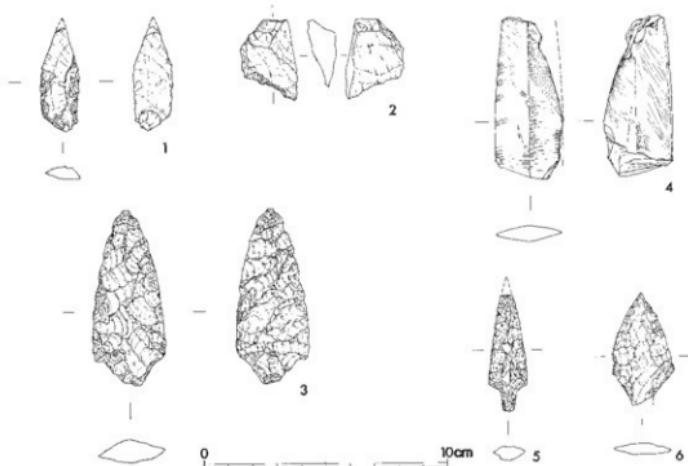


fig. 278
石器実測図



fig. 279
縄文時代早期の
土器拓影 1:1

4はC-b区土器群と共に出土した堆積岩製の磨製石剣である。基部に近い箇所と思われるが、明確ではない。鋸は明瞭ではない。弥生時代中期後半に属する。

5・6は弥生時代のサヌカイト製石鎌である。6は中央に大きな剥離面を残すものである。

fig. 279は押型文土器と燃系文土器の拓影である。

1～3は山形文で、1は平行線文のあとに施している。4は異形押型文である。5は燃系文土器の体部片と考えられるものである。

fig. 280-1～9はA区S B01出土の遺物実測図である。

1～4は弥生時代中期後半に属するものである。5～8は土製錘車で、6～8は土器片利用のものである。5の凹面には穴の周囲にヘラ描きの円形文がある。

9は鉄ヤリガンナである。裏面中央部に糸状のものが付着している。

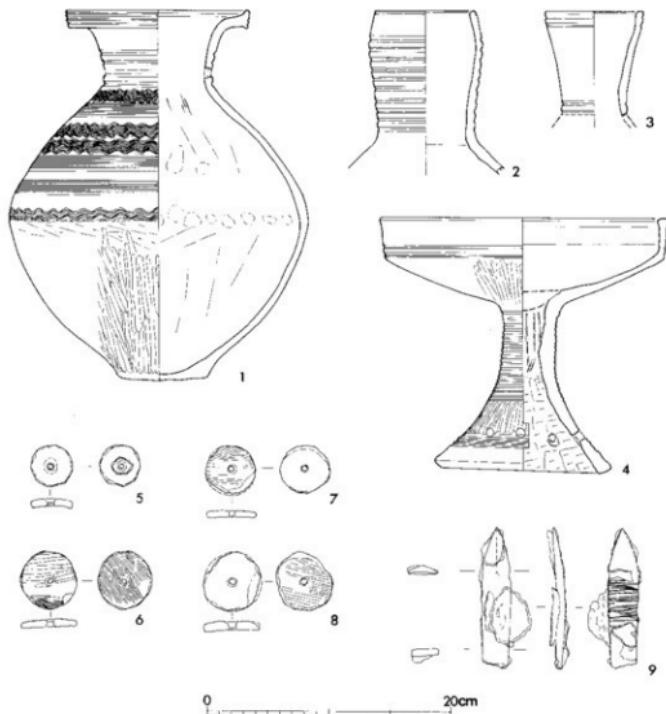


fig. 280
A区S B01
出土の遺物
実測図

fig. 281-1~4はC-b区土器群出土の遺物である。弥生時代中期後半でも末葉に近い時期と思われる。

同図5は、A区SK20（先年度調査）出土の大型壺形土器である。胴部や底部の破片もあるが接合できない。底径は約18cmである。口頸部から胴部上半部にかけて、板小口部による綾杉状文を密に施す。頸部と胴部に3条、口縁端部にも $2+\alpha$ の凸帯を巡らし、そこにも綾杉文を施している。胴部凸带上には、キザミ目を有する3条の垂下する棒状浮文を貼り付ける。SK20からは弥生時代中期後半の壺形土器の体部片が出土しており、この土器も同時期のものと思われる。

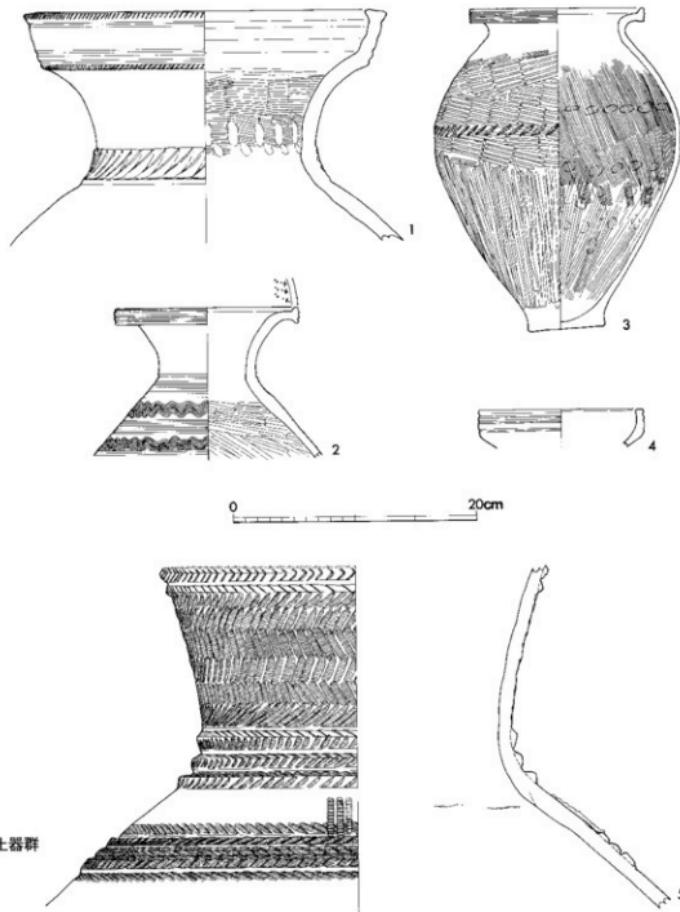


fig. 281
弥生土器実測図
1~4 C-b区土器群
5 SK20

fig. 282は歴史時代の土器である。

1～8は黒色土器A類である。今回出土した黒色土器は全てA類に限られる。2と4の口縁端部内面には1条の沈線が巡る。9世紀代と考えられる。9～12は土師器小皿である。9・10は9世紀、11・12はこれよりやや新しいかと思われる。13～15は瓦器碗・小皿である。13世紀代である。16はS T01出土の土師器鍋である。15世紀代と考えられる。17はB-2流土中出土の土師器鍋で、胴部外面に格子タタキを施す。16世紀代。

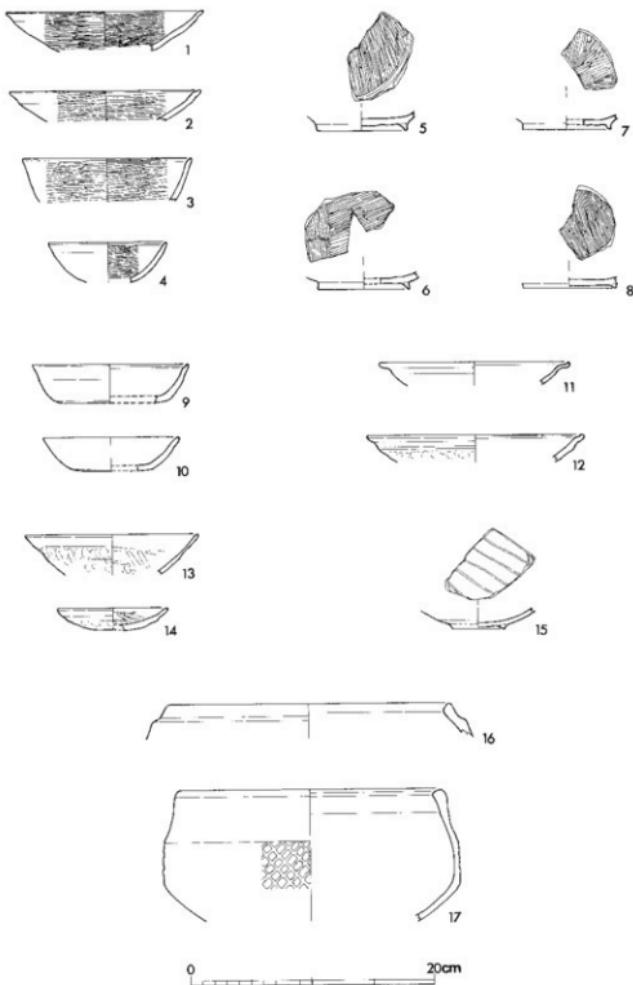


fig. 282
歴史時代の土器
実測図

4.まとめ

今から、2万5000年以前から存在するナイフ形石器が1点出土した。長さ4.2cmと小型のもので、ナイフ形石器としては新しいものと思われる。

今から1万年ほど前の有茎尖頭器と、ほぼ同時期に属すと考えられる押型文土器、撲糸文土器が検出された。有茎尖頭器はこれで同一丘陵上で計3本出土したことになり、土器が出土したことからも、ここが単なる狩猟場ではなく、一定期間の生活の場であったと推測できるようになった。

弥生時代では、径約8mの大型の住居址が検出され、土器と共に紡錘車、鉄ヤリガンナ等が出土した。また、規模は小さいが焼土坑も検出された。

弥生時代の土器は1点の第Ⅲ様式を除くと、他は第Ⅳ様式で占められ、この集落は後期を待たずに廃絶したものと考えられる。

当地は最近まで耕作地となっており、削平が激しかった。そのためか、石器の出土量は極めて少ない。B-2-c区斜面からはサスカイトの剥片、碎片が多く出土したが、弥生時代のものとは断定できない。

歴史時代の遺構で明確なものは、室町時代のS T01・02のみであった。C区の土坑群は、これと相前後する時期の墓壙とも考えられるが、断定はできなかった。室町時代の火葬墓は、北側のマンション建設に伴う調査でも検出されており、墓域がここまで延びていたことが確認できた。

なお、遺構の広がりを確認するため、B-2-c区から東へ延びる小尾根上と（第1トレンチ）、谷を挟んで東側に存在する道路際の尾根上に試掘溝（第2トレンチ）をいれたが、遺構・遺物共に検出されなかった。

23. 篠原南町遺跡

1. はじめに

篠原南町遺跡は、平成2年度の試掘調査によって、その存在が初めて確認された遺跡である。六甲川と袖谷川が合流して都賀川となる付近の右岸に広がると推定される遺跡で、現地表で標高約45mの段丘上に立地する。

今回の調査地点は、平成2年度に神戸女子大学遺跡調査会（代表藤井利章）によって、敷地面積2,560m²のうち約1,100m²の発掘調査が実施され、古墳時代前期の流路・溝が確認されている。今年度はマンション建設の設計変更に伴って、さらに約500m²についての追加調査を実施することとなった。調査にあたっては、遺跡調査会のトレンチ部分と若干重複するように調査区を設定し、両調査ができるだけ整合するよう努めた。



fig.283 調査地点の位置 1:5000



fig.284 調査対象地区

2. 調査の概要

今回の調査では、旧地表面を3枚確認できた。第1遺構面については全面調査を行い、さらに下層については幅2m、長さ50mの断面トレンチを北壁沿い（A）と西壁沿い（B）に設定して調査を行った。発掘調査の結果にもとづいて、下層から順に地形と遺跡の形成を復元的にみしていく。

第3遺構面

まず、調査区の中央部分を縦断する堅緻な青灰色シルト混じり細砂層の段丘構成層が最下層で確認できた旧地表面である（第3遺構面）。標高41.5~42.2mで、北から南へ傾斜する安定した旧地表面であるが、遺構は確認できなかった。この調査区中央を縦断して鞍状を呈する段丘の東西部分は深さ約2m以上の流路ないしは落ち込みで、乳色砂礫層を主体とする土石流によって埋没している。P-2区では、この土石流内の標高41.5mの地点から縄文時代晚期後半（滋賀里IV式）の縄文土器片が出土していることから、縄文時代晚期以降に埋没していたものと考えられる。

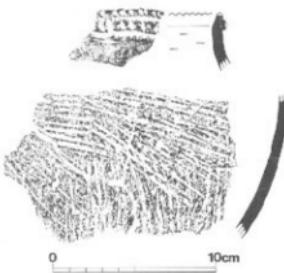


fig.285 縄文土器実測図

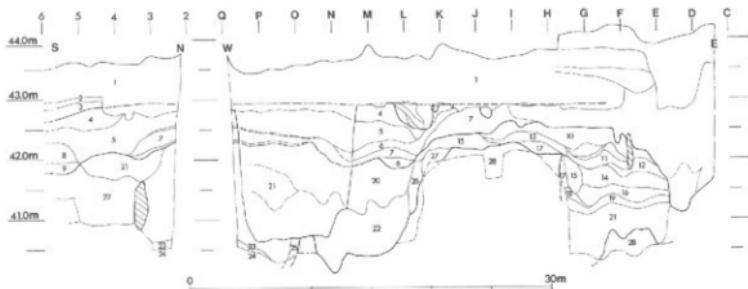


fig. 286 断割トレンチ土層断面図

1. 黒土と混在
2. 乳褐色シルト混じり細砂
3. 暗褐色シルト混じり細砂（土器包含）
4. 乳色中砂～粗砂
5. 乳色細砂～中砂
6. 黑灰色シルト質細砂
7. 乳黄色シルト混じり細砂
8. 乳灰色細砂
9. 灰色シルト混じり極細砂～細砂
10. 明乳白色中砂～細砂
11. 淡黃色極細砂～細砂
12. 淡緑灰色シルト混じり極細砂～細砂
13. 淡褐色シルト質細砂～中砂
14. 灰褐色シルト混じり極細砂～細砂
15. 黑灰色シルト質細砂（硬むし）
16. 乳褐色細砂～小砂
17. 灰色シルト混じり細砂
18. 淡黒灰色シルト質細砂～中砂
19. 乳褐色シルト混じり極細砂～細砂
20. 乳色細砂～細砂
21. 赤黄色中砂～粗砂（最大人頭大の跡）
22. 哺乳色細砂～細砂
23. 哺乳色細砂～中砂（縄文土器出土）
24. 明乳色細砂～細砂
25. 黑灰色シルト質細砂
26. 乳黄色細砂～細砂
27. 淡青灰色シルト混じり細砂
28. 淡青灰色シルト混じり細砂～中砂

さらに、この段丘が埋没した後は、安定した旧地表面は形成されず、黒灰色シルト層が堆積している西半は湿地状となり、東半は常に流路の水流に洗われていたと推定できる(第2遺構面)。遺構面の標高は41.5~42.5mである。出土遺物がなく、旧地表面の時期は判断できない。

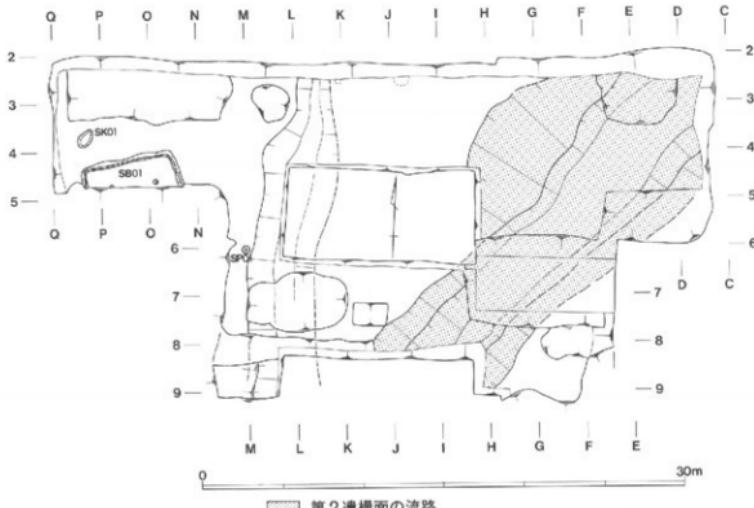


fig. 287 第1遺構面平面図



fig. 288 断割トレンチ全景（東から）



fig. 289 第1遺構面全景（東から）

やがて、土石流がおこり、乳色砂を主体とする弥生時代末から古墳時代前期の旧地表面第1遺構面が形成される（第1遺構面）。この遺構面は調査前に解体されたコンクリート建物基礎による搅乱が著しく、遺存状態はあまり良くない。確認できた遺構面の標高は41.9~42.9mで、北から南へ約1mの比高差がある。

第1遺構面で確認できた遺構は、竪穴住居址1棟（S B01）、土坑（S K01）、ピット（S P01）、流路などがある。

S B01

S B01は東西長6.05m、南北残存長2.50m、壁高最大25cmの古墳時代前期の方形の竪穴住居址で、南半は神戸女子大学遺跡調査会の実施した調査区（Bトレンチ）に延びる。埋土は暗褐色シルト混じり細砂層である。幅30cm前後、深さ20cm前後の周壁溝が巡る。床面には直径15cm、深さ45cmの柱痕をもつ主柱穴が2基確認できた。北側周壁沿いで土師器高坏部1個体、東側周壁沿いで土師器高坏部1個体、小型丸底壺2個体が出土しているほか、土師器壺・甕や製塙土器、磨石などが出土している。

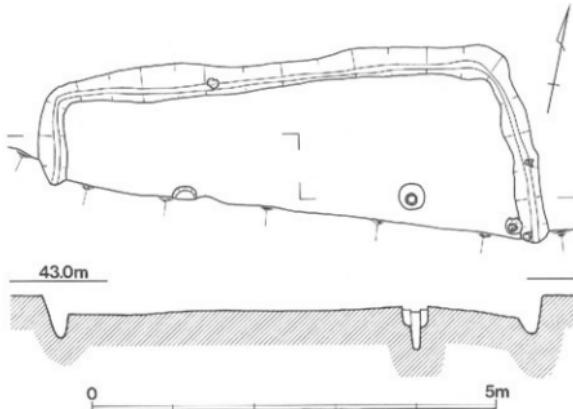


fig. 290 S B01実測図



fig. 291 S B01 (南から)



fig. 292 S B01土器検出状況

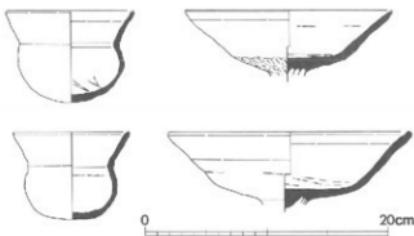


fig. 293 S B01出土土器実測図

流路

調査区を南北に流れる流路で、幅3.5m、最大深さ40cmである。埋土は淡黄色細砂と黒褐色シルト混じり細砂である。L・M-4区では黒褐色シルト混じり細砂層内から弥生土器がかたまつて出土した。そのほかはほとんど遺物を包含していない。弥生時代後期末のものであろう。

また、遺存状態が良好なP-4区周辺では、この第1遺構面の上層に厚さ約15cm前後の暗褐色シルト混じり細砂層があり、奈良時代～平安時代の須恵器・土師器が出土していることから、遺存状態が良好であれば、さらに遺構面の確認される可能性が考えられる。

3.まとめ

以上のように、今回の調査では、弥生時代末～古墳時代前期の遺構面が確認できたほか、さらに下層には流路が確認できた。

まず、重要な調査成果として、調査会の調査でも確認された下層の流路の時期が繩文時代晚期以降であることが判ったことが挙げられよう。また、古墳時代前期の竪穴住居の確認は明らかに当該期の集落址が調査地点の西側の段丘上～丘陵末端にかけて広がっていることを裏付けるものと言える。

24. 郡家遺跡 篠ノ坪地区 第2次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、天神川の扇状地を中心に神戸市東灘区御影町一帯に広がる弥生時代～鎌倉・室町時代にかけての遺跡である。

当遺跡は昭和54年度に実施された大蔵地区の調査で、柱掘形が一边1m以上の奈良～平安時代の掘立柱建物址が確認されたこと、「郡家」という地名が残されていることなどから兎原郡の郡衙推定地と考えられている。

今回の調査地にマンション建設が計画され、埋蔵文化財の存在を確認する試掘調査を昭和63年7月8日、8月9日に実施したところ、遺物包含層が発見されたため、工事影響部分について発掘調査を実施した。



fig. 294
調査地点の位置
1:2500

2. 調査の概要

発掘調査は既存の建物解体後、平成3年4月2日に機械による表土掘削作業を開始し、土器群、溝、柱穴列等の検出、写真撮影、実測作業の後、5月2日～17日までの調査中断期間を挟んで、竪穴住居、自然河道の調査を行い、6月7日に埋め戻し作業を実施して、調査を完了した。

地区割の設定 遺物の出土位置を明確にするため、調査区のはば中央を主軸とする任意の方向軸を設定し、4m方眼の地区割で全体を区分し、東西方向に1～8ライン、南北方向にA～Eラインを設けた。また、検出遺構は、神戸市三等多角点より引用した国土座標を基準に測量を行った。

基本層序 今回の調査地は、ほぼ北東から南西へ緩やかに傾斜する地形であり、北側より南側の堆積層が厚かった。また、調査区中央部と西端部は建物基礎による土層の搅乱が著しい状態であった。

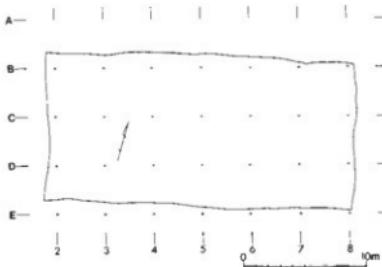


fig. 295 調査区設定図

当該地の基本層序は以下のとおりである。

- 第1層 褐色系砂質土（盛土層）
- 第2層 暗灰色粘質土（近世～近代の耕作土）
- 第3層 浅黄色砂質土
- 第4層 明黄褐色砂質土
- 第5層 暗褐色砂質土（古墳時代後期の土器を包含）
- 第6層 黒色～黒褐色砂質土（弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を包含）
- 第7層 黄褐色細砂～極細砂（よく締まった無遺物層）
- 第8層 灰色～暗褐色粗砂層（調査区西半で確認される自然河道堆積土、黒色～黒褐色粘土と互層、弥生時代後期の土器が出土）

第1層から第8層下面までの深さは約3mである。

検出遺構

自然河道

調査区中央部を南北方向へ縦断するように、粗砂層が堆積していることが確認された。この部分の堆積層は、無遺物層である7層が東から西に急激に下がり、その上に灰色～暗褐色粗砂と黒色～黒褐色粘土が互層になっていた。堆積の状態から、比較的水がよく流れる時期（洪水等による粗砂の堆積層）と滞水する時期（流れが極めて緩やかで、粒子の細かい堆積層）を繰り返していたことが判る。堆積土内からは、弥生時代後期の土器が出土したが、特に上層の土器出土量は多く、完形に近い弥生時代後期の土器が数個体出土した。また、中・下層の土器量は上層に比べて少なかった。

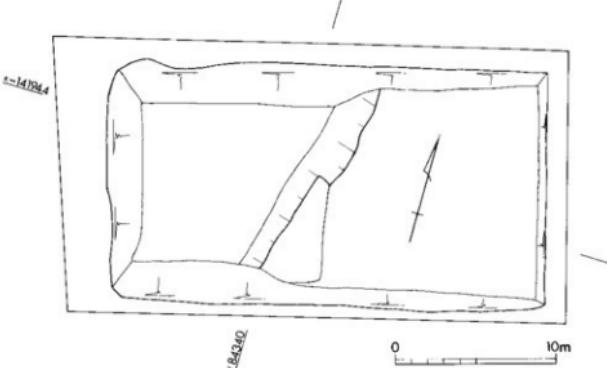


fig. 296 自然河道平面図



fig. 297 自然河道全景（西から）



fig. 298 自然河道内土器出土状況

竪穴住居址 自然河道が完全に埋没した後に、7層と河道の境界付近に竪穴住居址が建築される。これは東西約7.6m、南北約6.8m、やや歪な長方形で、柱穴が3箇所で確認された。東側と南側の一部には周壁溝が掘られ、それらの溝と接続して南東隅に直径約1m、深さ15の土坑が確認された。西側と北側には周壁溝は検出されなかったが、これは住居址床面が自然河道堆積土の粗砂層内に設けられているため、壁面からしみ出る水が浸透し、床面に溜まらないためと考えられる。住居址中央の床面には、およそ1m四方に炭が薄く堆積していた。また、南西隅は周壁溝が切れ、段状の平坦面がつくり出されている。形状からみてこの部分に出入り口が設けられていたようである。

南東隅の土坑および住居址堆積土からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が破片の状態で出土した。また、堆積土の最上層では、用途不明の石製品が発見された。

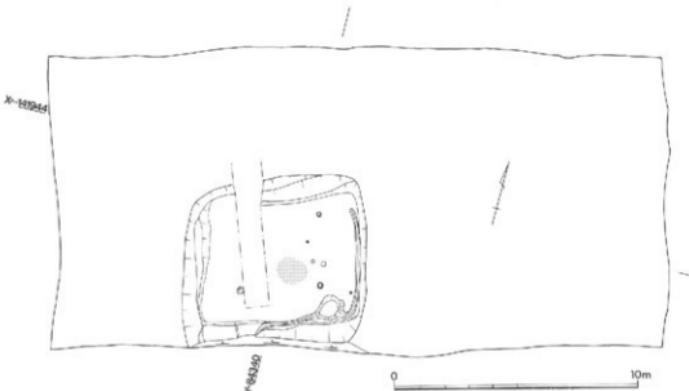


fig. 299 調査区平面図(1)

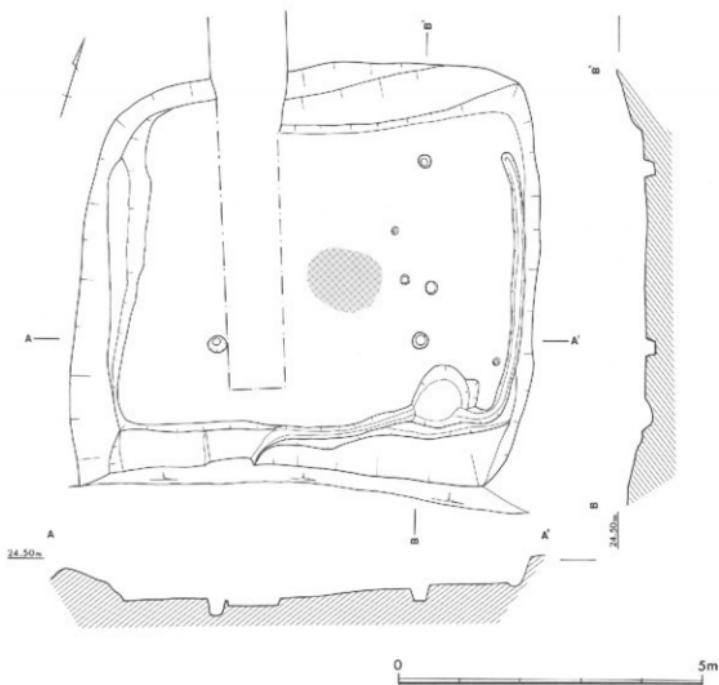


fig. 300 積穴住居址実測図



fig. 301 積穴住居址全景（西から）

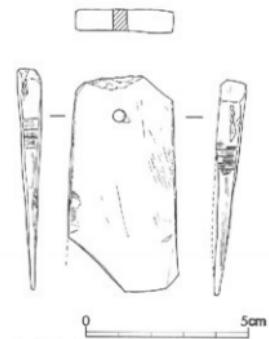


fig. 302 不明石製品実測図

SD 01

堅穴住居址が廃絶放棄され、埋没した後に調査地東端から中央部を斜めに横断した溝(S D01)が検出された。この溝は住居址の堆積土を掘りこんでつくられている。幅約35cm、深さ約20cmの断面U字形で、遺物はほとんど出土しなかった。

SD 02

調査区東端で確認された幅約40cm、深さ約35cmの断面U字形の溝で、建物基礎による搅乱を受けており、わずか2m残っているのみであった。遺物は出土しなかった。

柱穴列

調査地の北端では、3箇所の柱穴が東西方向に並ぶのが確認された。柱穴は直径30cm、深さ20cm前後で、第8層の自然河道堆積土を掘り込んでいる。埋土から土器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

土器群

遺構検出面である第7層黄褐色細砂～極細砂（よく締まった無遺物層）および第8層灰色～暗褐色粗砂層（自然河道堆積土）の上面は一様に平坦でなく、窪んだ部分に第6層黒色～黒褐色砂質土が堆積していた。D-6・7区では、この堆積層から古墳時代前期の甕3個体、鉢1個体、高杯1個体がまとまって発見された。出土状態からみて、土器群は前述の窪みの中に一括で投棄されたと考えられる。

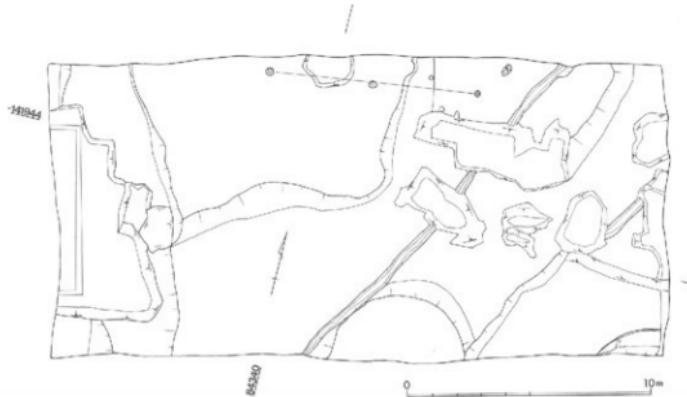


fig. 303
調査区平面
図(2)



fig. 304 調査区全景（西から）



fig. 305 D-6・7区土器群

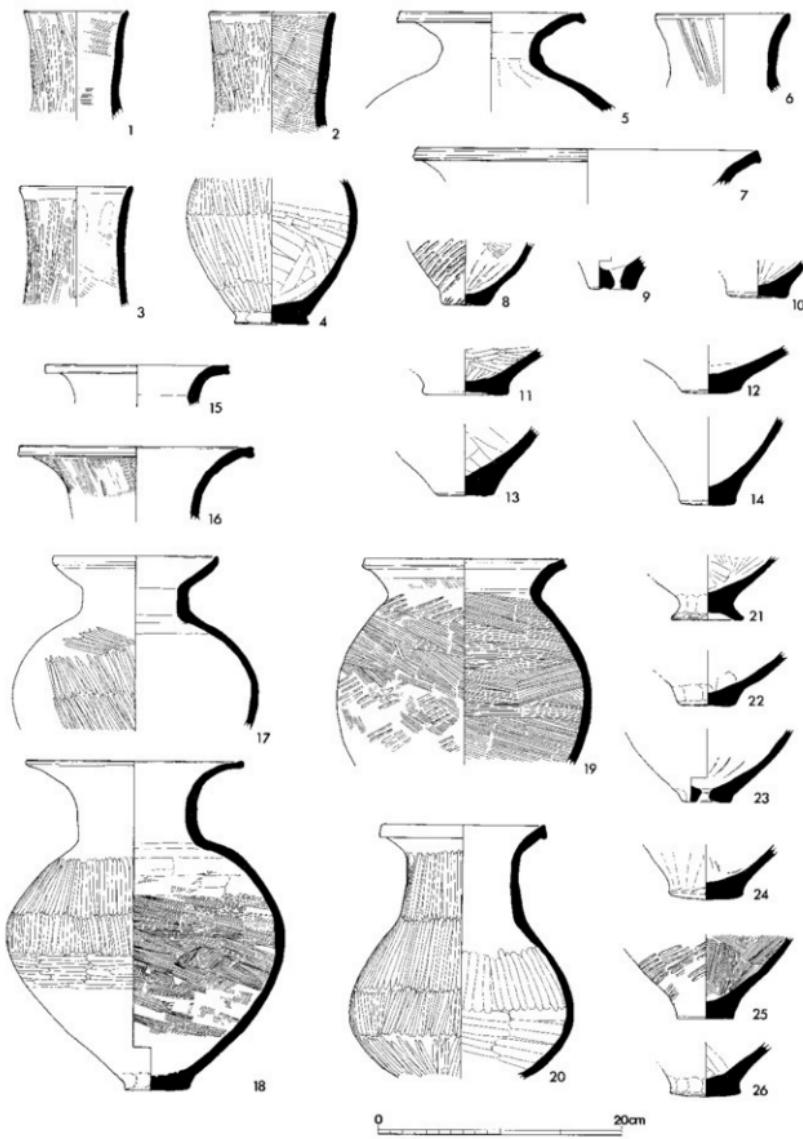


fig. 306 自然河道出土土器実測図 1~4 下層 5~14 中層 15~25 上層 26 最上層

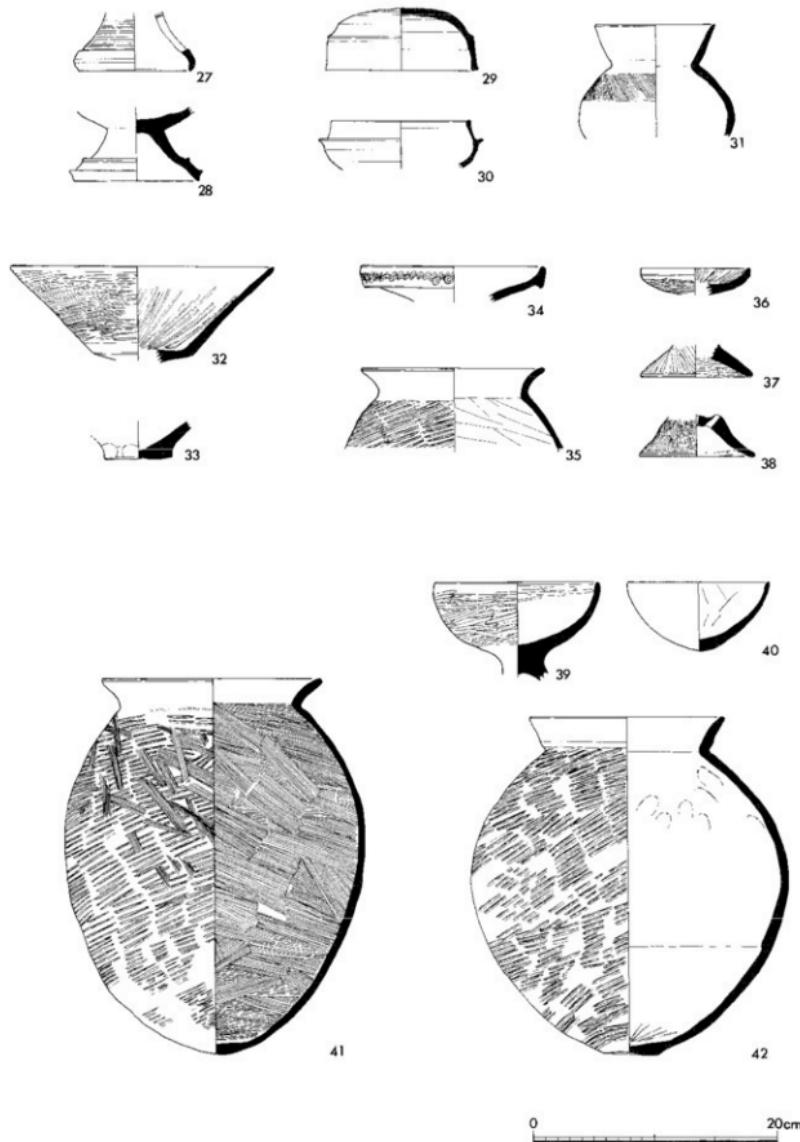


fig. 307 出土土器実測図 27~30 落ち込み 31 灰色細砂 32~38 整穴住居址

39~42 D-6・7区土器群

- 落ち込み 東南端では、北東～南西方向にかけて粗砂とシルト～粘土層が互層となって堆積し、上層からは古墳時代後期の須恵器、土師器、鉄滓、下層からは弥生時代後期～古墳時代後期の土器が出土した。
- 3.まとめ 今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代後期までの遺構・遺物が確認された。遺跡の時期区分は遺構の切り合い関係と土層の堆積状況からみて、大まかに4時期に分けることができる。
- 第1期 西半部では、調査地をちょうど斜めに横切るように、北東～南西方向にかけて自然河道が流れる。河道の東岸は検出されたが、調査範囲内では西岸は確認されず、比較的規模の大きい河道であった可能性がある。自然河道の埋没時期は、出土土器から弥生時代後期と判断される。
- 第2期 河道の埋没後、地山層と河道堆積層の境目に堅穴住居址がつくられる。このような土質の不安定な場所に、あえて住居を建築した理由は不明である。住居址の時期は、出土土器から弥生時代後期末～古墳時代初頭である。
- 第3期 坚穴住居址が放棄されて埋没した後、SD01・02、柱穴が掘りこまれる。この時期は地面が平坦ではなく、特に南半部は凹凸が著しい状態であったことが判る。その窪みに一括して土器を投棄しているところが1箇所確認された。これらの遺構の時期は、おそらく古墳時代初頭～前期である。また、東南隅の落ち込みは、この時期の土石流等によって、地山層が削られて形成されたと考えられる。
- 第4期 第3期の段階で、地面の凹凸が埋没し平坦化してゆくが、東南隅の落ち込みは、数度の洪水による粗砂とシルト～粘土の薄い堆積層により埋没してゆく。その土層からは古墳時代後期の須恵器、土師器、鉄滓が出土しているので、古墳時代後期が最終埋没の段階であると判断される。この時期頃から調査区付近は、河川の氾濫の影響を受けない安定した地形となることが土層断面の観察によって明らかであるが、この時期以降の遺構は確認されず、居住地としてではなく、専ら耕作地等に利用されていたようである。

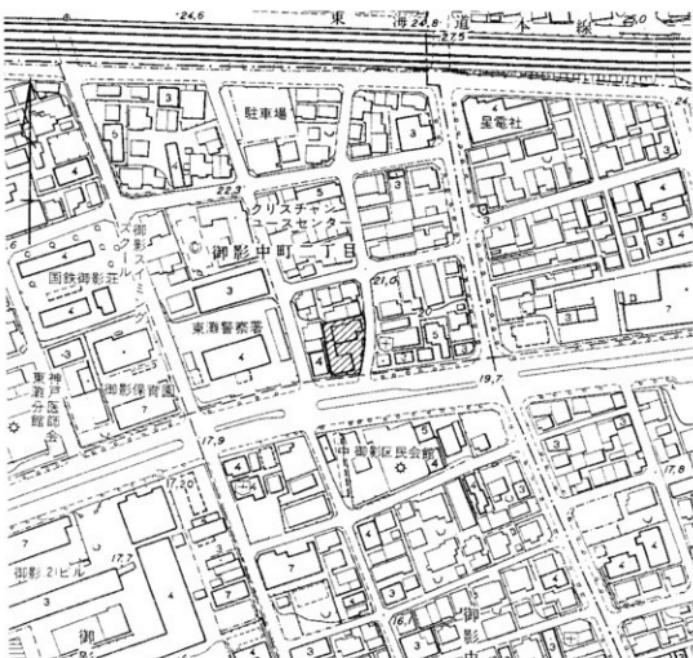
25. 郡家遺跡 御影中町地区 第5次調査

1. はじめに

神戸市東灘区御影町郡家を中心とする郡家遺跡は、これまでに40数次におよぶ発掘調査の結果、弥生時代から安土桃山時代までの遺構・遺物が、多く発見されている。

御影中町地区は、昭和56年度に第1次調査が実施されて以来、過去に4度の調査が行われ、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居址、掘立柱建物址のほか、祭祀遺構などが確認されている。

今回、当地にマンションが建設されることになり、試掘調査を実施したところ、遺物包含層および遺構が確認されたため、発掘調査を実施することになった。



2. 調査の概要

〔I区・II区 第1遺構面〕

淡灰黄色粘性砂質土層上面で、溝数条と土坑・ピットを検出した。

S K 01

I区中央部で検出した長辺約1.1m、短辺約75cm、深さ約40cmのやや歪な長方形の土坑である。埋土は、茶褐色砂質土で、須恵器が出土している。

S D 01

I区北半部とII区南西部で検出した、幅1~2m、深さ数十cmの深い溝である。灰褐色砂質土がベースで、黄褐色砂の埋土である。須恵器高环甌や、黒色土器片が出土している。

その他、I区中央部から南へ延びる溝や、その溝を切る東西方向の溝が確認された。

〔I区 第2遺構面〕

溝4条のほか、土坑、ピットを多く検出した。

SK04 北半部で検出した径90~110cm、深さ約25cmの土坑である。奈良・平安時代の須恵器杯蓋や、黒色土器片が出土している。

SK08 中央部で検出した。北半は搅乱で不明であるが、径約1m、深さ約50cmの土坑である。古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器杯蓋の他に、瓦器小皿が出土している。

SK12 中央部で検出した。東半は搅乱で不明であるが、径約1m、深さ約35cmの土坑である。古墳時代後期の須恵器杯が出土している。

SD08 中央部で検出した。北東から南西方向に向かい、「く」の字に屈曲して南へと延びる、幅30~40cm、深さ約10cmの溝である。

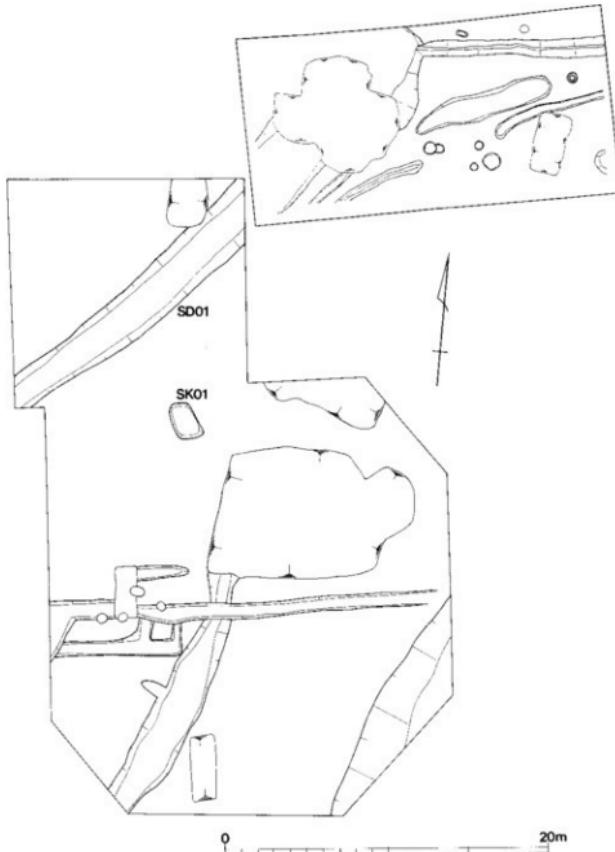


fig. 309
第2遺構面平面図



fig. 310 II区第1遺構面全景（西から）



fig. 311 I区第1遺構面全景（北から）



fig. 312 II区第2遺構面全景（西から）



fig. 313 I区第2遺構面全景（北から）



fig. 314 II区第3遺構面全景（西から）



fig. 315 I区第3遺構面全景（北から）

〔I区 第3遺構面〕

S P 137

南半部で検出した長径約75cm、短径約45cmの長方形である。「て」の字状口縁の土師器小皿が出土している。

S P 160

中央部で検出した長径約70cm、短径約60cmの隅円方形のピットである。奈良・平安時代の須恵器坏蓋が出土している。

〔I区 第4遺構面〕

S B 01

中央部西側で検出した堅穴住居址である。西側は調査区外のため不明であるが、一辺約6mの方形のものと考えられる。検出面からの深さは約30cmである。北辺に接してカマドが存在し、土師器の羽釜・楕が出土した。埋土からは、古墳時代後期の須恵器坏身・坏蓋が出土している。



fig. 316
第2遺構面平面図

SD 12

中央部から南半にかけて検出した、南北方向の溝である。幅約1m、深さ約30~50cmである。暗褐色砂質土を埋土とする。古墳時代後期の須恵器坏身・蓋が出土している。

〔I区 第5遺構面〕

黄褐色砂層上面で、溝1条と土坑、ピットを検出した。

SD 13

南半部で検出した東西方向の溝である。幅約80cm、深さ約15cmである。古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

さらに第5遺構面の下層は、洪水砂が厚く堆積しており、その黄褐色砂中からは、弥生土器片や、5世紀末から6世紀初頭頃の須恵器、埴輪片が出土している。

〔II区 第2遺構面〕

東半部の淡灰褐色砂質土上面で、畦畔と人足跡を確認した。畦畔は、幅約60cm、高さ約15cmである。足跡は、東西方向に並ぶものが多い。足跡の長さは、20cmから20数cmである。



fig. 317
第3遺構面平面図

〔II区 第3遺構面〕

溝2条と土坑、ピットを検出した。遺構内から平安時代の遺物が出土している。

〔II区 第4遺構面〕

溝数条と、土坑、ピットを検出した。

SX05 東半部で検出した溝の浅い落ち込みである。幅約1.8mで、埋土中から、古墳時代後期の須恵器坏が出土している。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物を確認した。第4遺構面では、古墳時代後期の竪穴住居址を検出しており、当遺跡の集落址の拡がりを検討する上で、貴重な資料となつた。ピットは、各遺構面で多く確認した。建物の復元には至っていないものの、古墳時代から古代にかけて、何棟かの建物が建っていたと考えられる。



fig.318
第4遺構面平面図

遺物としては、埴輪や土錐が出土した。また、遺物包含層からは石帶（丸鞘）が1点出土している。

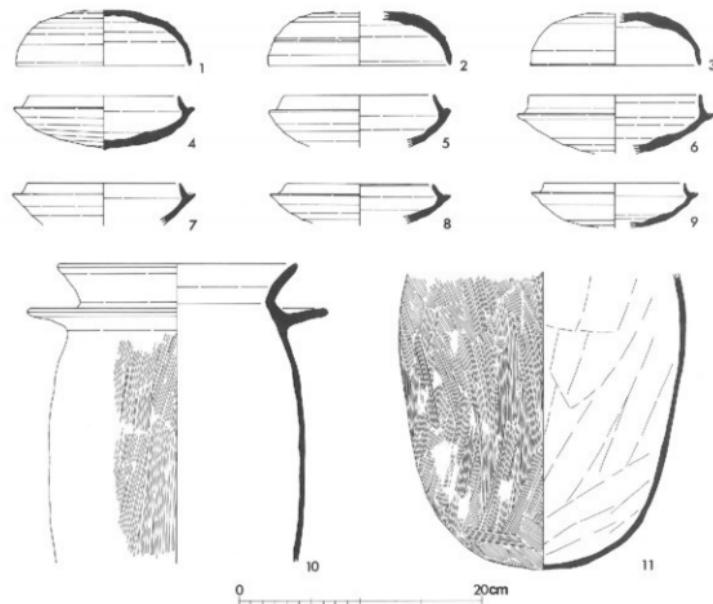


fig. 322 SB01全景（南から）



fig. 323 SB01土師器出土状況



fig. 324 I区第5遺構面全景（北から）



26. 北神第2地点古墳・第3地点古墳

1. はじめに

北神第2地点古墳・北神第3地点古墳の2基の古墳は、北神三団地の建設に伴う分布調査によって、その名称が付けられた。

北神三団地の区域内では、昭和54年より発掘調査を行っている。これまでに、第一地区内（現在の鹿の子台）で、古墳時代後期の竪穴式石室を埋葬施設とする北神第13地点古墳、横穴式石室を埋葬施設とする北神第35地点古墳や木棺直葬をしている北神第9地点1号墳・2号墳などの4基が発掘調査された。そのほか、弥生時代の集落址である北神第4地点遺跡や室町時代の火葬址である北神第46・47地点遺跡などの多くの遺跡が明らかになってきた。

また、道場町・長尾町一帯では近年の圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、多くの遺跡が見つかっている。

2. 調査の経過

北神第2地点と北神第3地点の2基の古墳は、整備・保存されることになった。このため、古墳の形状や規模、築造時期など基礎的な資料を得るために、昭和62年度にトレンチによる確認調査を行って古墳の規模を確認した。そして、平成2～3年度にかけては、墳形の未確定の部分および埋葬施設の調査と第2地点古墳周辺の試掘調査を実施している。

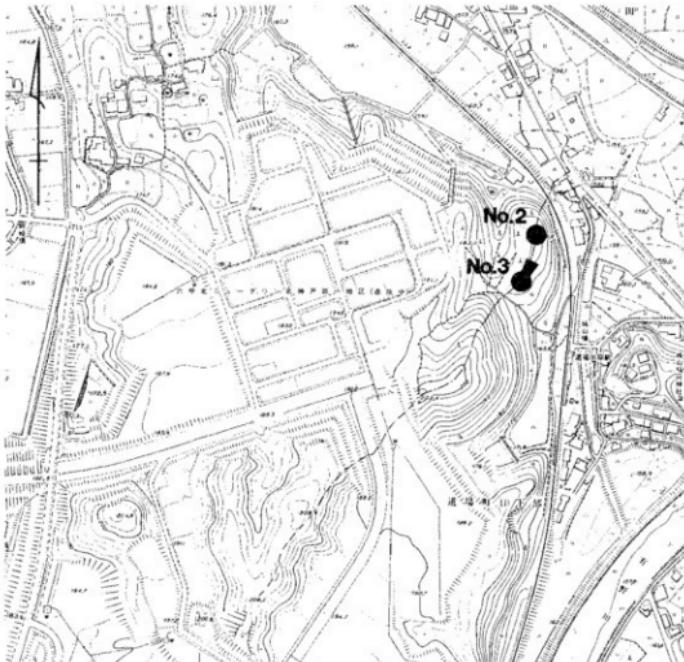


fig. 325
調査地点の位置
1:5000

3. 立地

北神第2地点古墳・北神第3地点古墳は六甲山系北側の神戸市北区八多町・道場町・長尾町に広がる標高200m前後の丘陵の先端尾根上に立地している。北神第2地点古墳が尾根の先端側につくられており、両古墳の間隔は約15mである。両古墳とも尾根上の原地形を利用してつくられ、平地からの標高差は約20mである。ここからは、六甲山系の北側に源を発する長尾川・八多川・有野川・有馬川が合流して一本となり武庫川に流れ込む地点を見おろせ、また大阪から福知山を経由して日本海側にぬける交通路（現 国道176号線）がすぐ下に通っており、その道から加古川水系の三木や西脇方面にぬける道（現 県道三木・三田線や県道西脇・三田線）の分岐点も眼下に見おろせる交通の要地である。



fig. 326 調査地遠景 (東から)



fig. 327 第2・第3地点全景 (南西から)

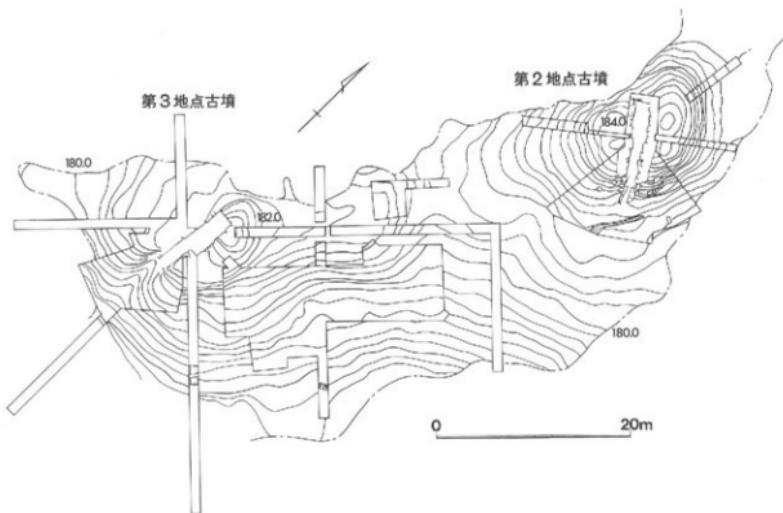


fig. 328 第2・第3地点古墳測量図

4. 調査の概要

(1) 北神第2地点古墳

古墳の形と大きさ 北神第2地点古墳は、西側が後世に大きく削られているが、調査の結果から直径17m、高さ約2.5mの円墳と考えられる。尾根の高い部分に盛り土をしてつくられており、自然の地形をうまく利用して、石室の入口方向からは実際より大きく見える。

石室の形と大きさ 埋葬施設は南東方向に開口した両袖式の横穴式石室で、二つの袖石に大きな一枚石を使っている。石室の全長は8.6mで、玄室長3.8m、玄室幅2.3m、羨道長4.8m、羨道幅1.3mです。南側（右側）の側壁の上部は大きく崩れしており、天井石もすべてなくなっているが、玄室の高さは約2m以上あったと推定される。石室は、側壁の石を天井に向かって徐々にせり出す「持ち送り」をしている。石室に使われている石材は、この付近で産出する凝灰質砂岩である。

石室内部の状態 石室内には崩れた側壁の石や天井石と土が流れ込んでいた。玄室のほとんどは、過去の盜掘により床面まで掘られており、築造当時の様子は判らなかった。しかし、水晶製の勾玉や須恵器・土師器・鉄製品の破片が残っていた。また、盜掘時のものと考えられる銅鏡（永楽通宝）も出土した。玄室の床には、つくられた当時は板石が敷いてあったと考えられ、一部に残っていた。

羨道部には崩れた石室の石材が土砂とともに多く落ち込んでおり、このため盜掘をまぬ

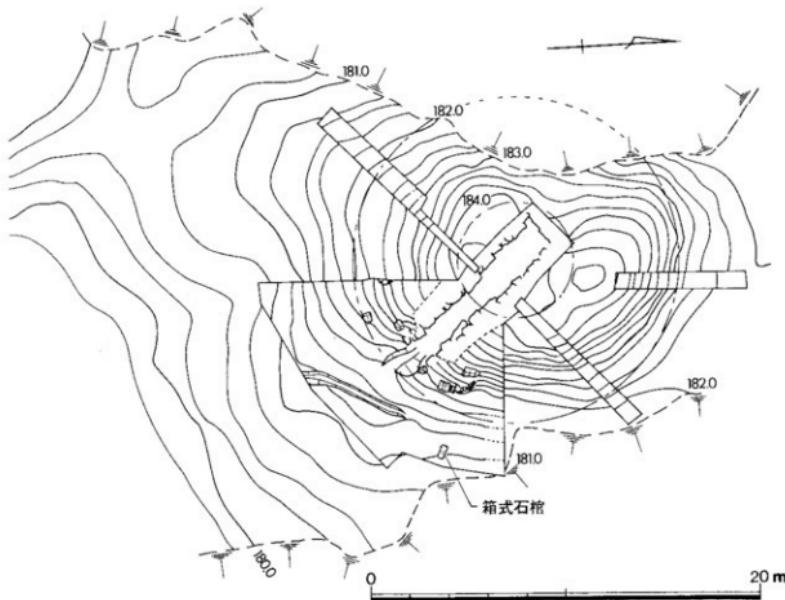


fig. 329 第2地点古墳測量図

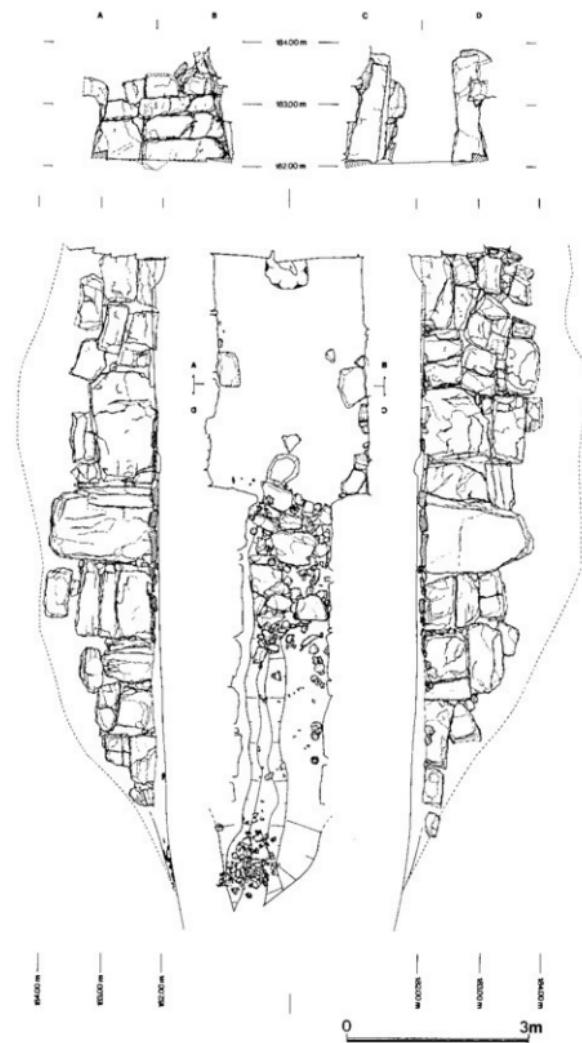


fig. 330 第2地点古墳石室実測図

がれたようである。入口に近い左側壁（北側）に沿って、須恵器の壺や提瓶など6個体が並べ置かれていた。玄室寄りの部分では、床面に多くの石とともに須恵器や土師器、鐵鎌などの鉄製品、耳環（金環）、滑石製臼玉、琥珀製壷玉、ガラス玉、土玉などの装身具が出土した。出土した須恵器の時期から、石室へは2回の埋葬が行われたと考えられるが、遺物の出土状態から、その後何らかの理由で玄室内の副葬品が羨道に放り出されたと思われる。

羨道部には排水溝が設けられているが、入口付近は幅が広く、墓道としての役目を兼ねていたものと考えられる。石室の入口には、須恵器の壺が碎かれた状態で出ている。これは、墓の前で死者のための祭りを行ったものと考えられる。

箱式石棺

石室入口の北側、墳丘の裾から小型の箱式石棺が見つかった。幅28cm、長さ65cm、深さ17cmで、本来は四方に板石を組んでいたと考えられるが、短側壁と長側壁の2枚の板石しか残っていなかった。出土遺物はないものの、古墳と関係のある施設と考えられる。



fig. 331 第2地点古墳石室全景（南東から）



fig. 332 第2地点古墳石室奥壁（南東から）



fig. 333 第2地点古墳羨道部遺物出土状況（北西から）



fig. 334 第2地点古墳羨道部遺物出土状況（南西から）

北神第2地点古墳は、石室内から出土した遺物から、古墳時代後期の6世紀後半につくられ、6世紀末頃にさらに追葬が行われたと考えられる。



fig. 335 第2地点古墳石室入口の遺物（南東から）

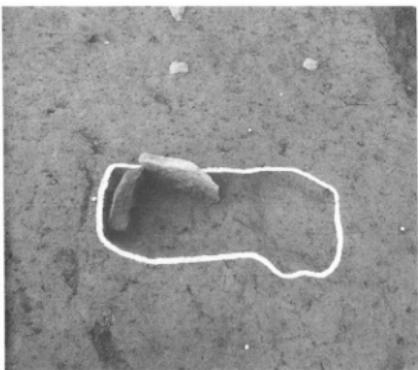


fig. 336 第2地点古墳箱式石棺（南西から）



fig. 337 第2地点古墳に副葬された土器
(楠華堂撮影)

(z) 北神第3地点古墳

古墳の形と大きさ 北神第3地点古墳は、前方部を尾根の先端方向である北西に向けた前方後円墳である。墳丘は全体に後世にかなり削られていたが、今回の調査で得られたデータから復元すると、全長36m、後円部径27m、後円部高約5m、前方部長11m、くびれ部幅14.5m、前方部端幅16.5m、前方部高約2.6mとなる。前方部端裾には溝が掘られている。

石室の形と大きさ 埋葬施設は南方向に開口した左片袖式の横穴式石室で、全長8.6m、玄室長5.0m、玄室幅2.0m、羨道長3.6m、羨道幅1.1mである。過去に盜掘にあって、玄室の天井石はすべてなくなっており、羨道部の天井石も最奥の石が崩れかかって残っているだけであった。また、西側の側壁は1段目を残しどんど崩れ、東側の側壁も最上段の石をほとんど欠いているため、正確な石室の高さは判らないが、玄室高約2.5m、羨道高約1.5mと考えられる。石室に使われている石材は、付近で産出される凝灰質砂岩である。

石室内部の状態 玄室の床には凝灰質砂岩の板石とチャートの礫とを敷いた面と、その上に拳大の礫を敷いた面があり、追葬があったと考えられる。羨道の床には礫が敷かれているだけであった。

盜掘によって石室内はかなり荒らされており、副葬品もほとんど取り去られていたが、埋まった土の中から須恵器の坏身・提瓶・甕・蓋や馬具・鐵鎌・ガラス製小玉などが出土している。

線刻 また、奥壁の向かって左下隅の石には直径12.5cmの「○」印の線刻がある。

墓道 石室の入口から後円部の裾にかけては排水溝を兼ねた墓道がつくられており、その底には飛び石状に石が置かれていた。この墓道内からも須恵器の坏・壺・甕・蓋が出土している。

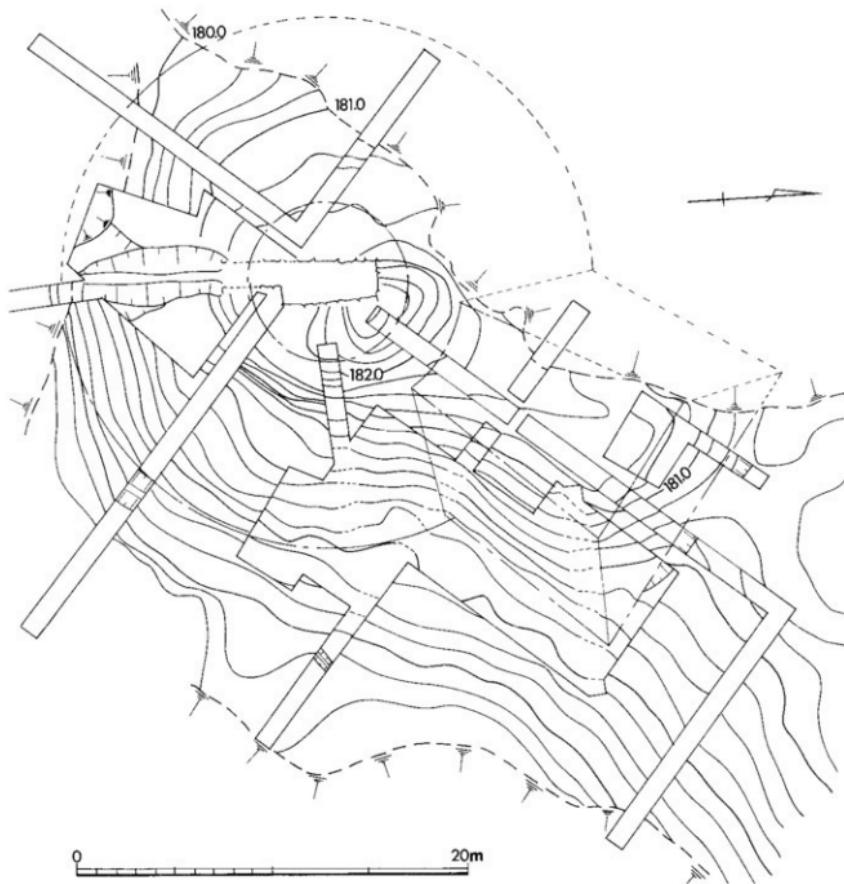


fig. 338 第3地点古墳測量図

石室内や墓道から出土した遺物から考えると、この古墳は古墳時代後期の6世紀中頃に
つくられたと考えられる。

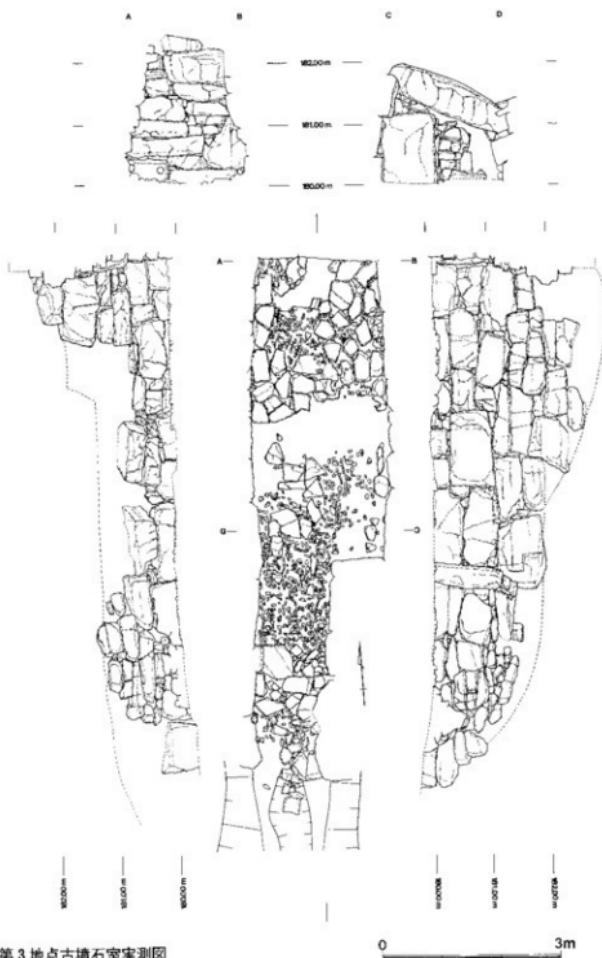


fig. 339 第3地点古墳石室実測図



fig. 340 第3地点古墳石室全景（南から）



fig. 341 第3地点古墳石室奥壁（南から）



fig. 342 第3地点古墳石室左側壁（南西から）



fig. 343 第3地点古墳玄室内遺物出土状況（南から）

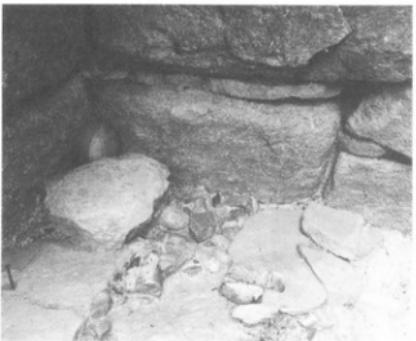


fig. 344 第3地点古墳石室奥壁の線刻（南から）



fig. 345 第3地点古墳石室奥壁の線刻近景

5. まとめ

以上のように今回の調査では、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳を2基調査した。

北神第3地点古墳は6世紀中頃につくられた前方後円墳であった。前方後円墳は当時のその地域の首長墓と考えられ、この古墳も昔のこの地域を治める首長の墓と考えられる。横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳の本格的な発掘調査の例は神戸市内では初めてであり、兵庫県下でも3例目であることから貴重な資料となる。また、「○」印の線刻は県下で初めて発見されたものであり、近畿地方でも珍しいものである。

北神第2地点古墳は6世紀後半につくられた円墳である。両袖式の横穴式石室はこの時期には珍しく、石材も大きく立派であることなどから、北神第3地点古墳に続く、この地域の首長墓と考えられる。

これまで北神三団地内で調査された古墳は今回の2基の古墳も含めて6基になる。これらの古墳は同時期につくられたものがないことから、この地域の首長墓がこの丘陵上に次々とつくられていったことが判り、この地域の古墳時代の社会を知る上で貴重な資料となる。

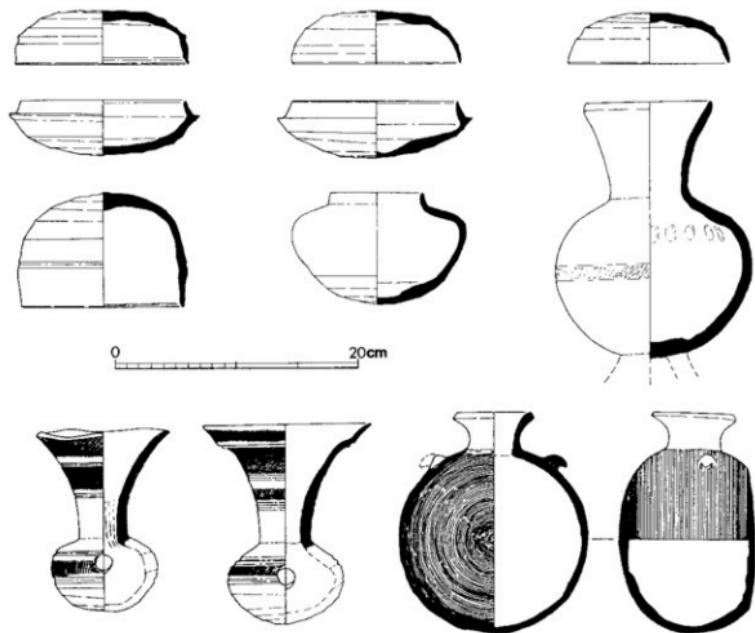


fig. 346 第3地点古墳出土土器実測図

27. 宅原遺跡 宮ノ元地区

1. はじめに

宅原遺跡宮ノ元地区は、昭和59年以来県営長尾地区土地改良事業に伴う発掘調査の結果、古墳時代前期～江戸時代にわたる遺構・遺物が発見され、連面と地域の中心集落として営まれてきたことが判明している地区である。特に、昭和60～62年の調査においては、奈良時代前期の掘立柱建物址が多数検出され、また区画溝と想定される大溝内から木製面や土器が多量に出土し、東に隣接する岡下地区出土の「評」の墨書き土器とともに、奈良時代前期には当地区が官衙的性格を備える地域であったと想定されている。

昭和63年4月には、今回の調査地点の東側の水田が土地改良事業に伴って発掘調査され、中世の掘立柱建物址4棟や古墳時代後期～中世にわたる遺物が多数検出されている。

今回の調査地点は北神戸リサーチパークの第1地区・第2地区・第3地区を貫通する市道長尾線の建設予定地内の一帯である。昭和62年に試掘調査を実施した結果、棚田とその東側の開析谷に営まれた水田において中世の遺物包含層と遺物を多量に検出したため、工事着手前に発掘調査を実施することになった。

今回の調査は、棚田における本格的な調査と、その北西部の丘陵における遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。

2. 調査の概要

試掘調査 試掘調査は、本調査地北側の竹藪内に一辺2mの試掘坑3箇所、西側の丘陵斜面に2m×5mの試掘坑3箇所を設定して実施した。全ての試掘坑で表土直下に地山が検出され、遺構・遺物等は確認されなかった。



fig. 347
調査地点の位置
1:2500

棚田部分の調査 調査地の現状は、5筆の水田が1.3~1.5m前後の段差をもって棚状につくられている。

最も高い位置にある水田2筆は丘陵の裾を削平して造成されているものと推定された。

重機による現耕作土除去作業の結果、高位の水田は縁辺を盛り土によって畦畔をつくり、水平な水田面に造成しており、旧状の地山傾斜面を残すものの上部は相当の削平を被っている。下位の水田3筆では、江戸時代の旧耕土を残し遺物包含層が良好に残存していた。

遺構はすべて地山面において検出した。検出遺構は、掘立柱建物址3棟、土坑1基、火葬墓1基、落ち込み11基、井戸1基を検出した。

奈良時代の遺構 3間×5間の南北棟の総柱の建物である。東西6.7m、南北12.5mの規模をもつ。柱間

S B 01 距離は梁間2.1mの等間隔、桁行2.4mの等間隔である。柱掘形を一辺50cm前後の方形に掘り、20cm前後の柱を据えていたと推定される。建物の棟方向はN29°Wを採っている。

S D 01 建物の西側桁行に沿って幅60cm、深さ20~30cm前後で「コ」の字に巡る、断面V字形の溝を検出した。溝と掘立柱建物址との関係は、溝の埋土を取り除いた段階で建物北西隅の2基の柱掘形の全体が検出できたことから、溝は建物と同時かやや遅れて掘られたと考え



fig. 348 調査区全景（東より）



fig. 349 掘立柱建物址柱穴群
(西より)

られ、掘立柱建物に伴う排水溝か区画溝と想定される。

また、掘立柱建物西側桁の北西隅柱から3本目の桁柱は検出されなかった。柱掘形が浅かったため削平を被ったか、あるいは入り口に相当し柱を据えていなかったか、両方の可能性が考えられる。

S 802 中世の遺構 2間×4間以上の南北棟建物である。南北6.2m以上、東西4.9mの規模がある。柱間距離は、南側梁間でやや東に偏り、東側1.7m、西側2.4m、北側梁間で2.45mの等間である。桁行の柱間距離は東側桁で1.5m等間、西側桁の中央で1.3m等間、両隅柱間で1.8m等間



fig. 350 調査区平面図

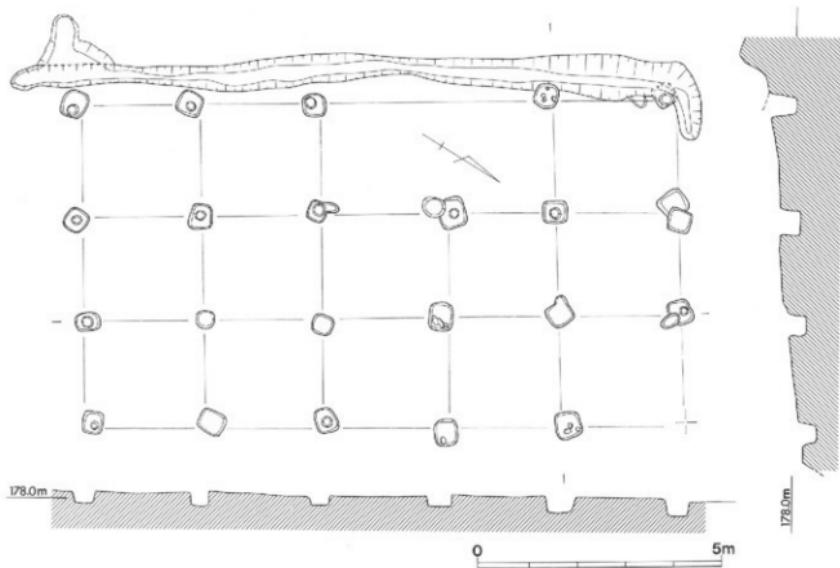


fig. 351 SB 01実測図



fig. 352 SB 01全景（北より）

である。柱掘形は、直径40cm前後の円形掘形である。掘形の深さは、南側梁柱で深さ70cm前後、桁柱で10~60cmと一部で浅く掘られている。建物の棟方向はN13°Eを探っている。

SB 03 2間×3間以上の東西棟建物である。東西4.5m以上、南北は東側梁で3.9m、西側梁で4.8mであり、台形状の平面形を採っている。柱間距離は西側梁の隅柱より1.2m等間、中央で2.0m、東側梁間の隅柱より1.2m等間、中央で2.7mである。桁行の柱間距離は南側桁で東側2.8m、西側で1.9m、北側桁で西側1.5m、東側で3.0mで、両側に偏って間柱がつくられている。柱掘形は、直径40cm前後の円形に掘形を掘り、深さは40cm前後残存

している。建物の棟方向はN75°Wを採っている。

SK01

調査地中央東端で検出した長椭円形の土坑である。長径1.25m、短径80cm、深さ20cmの規模で、断面は逆台形をしている。土坑中央の上層部に30cm大の河原石を置き、その周辺部に5~10cm大の円礫を充填している。遺物は土坑底から須恵器片・土師器片が出土している。

SD02

S X09の西辺の中央部から南東に延びる溝である。南端部は現農道によって削られている。また、溝の北端は削平されて、浅くなっている。溝の幅は30cmで、断面はU字形である。溝は、傾斜に沿って深くなり、残存する最も深い地点で20cmである。遺物は埋土内より

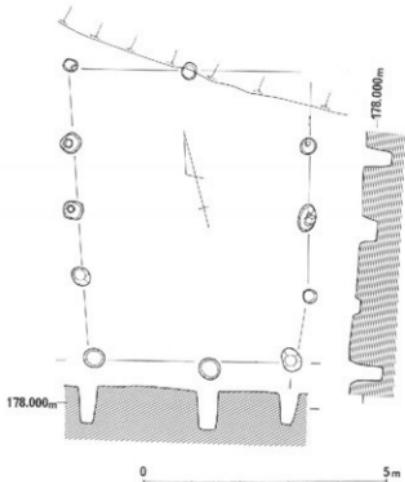


fig. 353 S B 02実測図

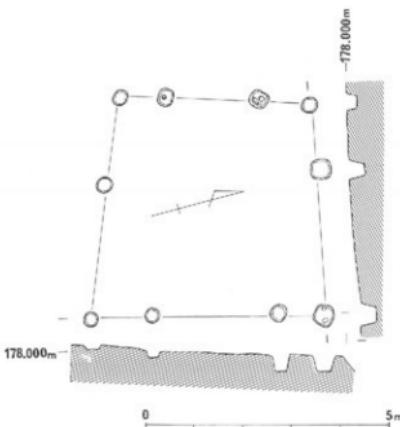


fig. 354 S B 03実測図



fig. 355 S B 02全景 (東より)



fig. 356 S B 03全景 (東より)

り、須恵器・土師器片が多数出土している。

火葬墓

調査地北端の丘陵裾で検出した。一辺90cm、深さ30cmの方形掘形で、掘形埋土の中央部の上層は3~10cmの大いな小円礫を埋めている。また、下層は炭を多量に含む灰色粘質土が堆積していた。掘形底面はほぼ平坦で、掘形はほぼ垂直に掘られている。掘形側面下部から底面にかけては赤く焼けている。遺物の出土がなく、時期の特定はできないが、形態および過去の類例から中世火葬墓と考えられる。

S X09

調査地東端で検出した方形の落ち込みである。東側は農道によって削平されている。落ち込みの西辺は一辺3.0m、深さ8cmである。落ち込みの底は平坦で、掘形の壁際の一部では幅10cm、深さ5cm前後の溝が検出された。埋土内からの出土遺物は、土師器・須恵器の細片があるが、時期の判明する遺物はない。しかし、SD02がS X09を切って掘られてのことから、SD02より以前に掘られた落ち込みであると推定される。



fig. 357 火葬墓近景（東から）



fig. 358 S X09全景（東から）

近世以降の遺構 調査地南部の上段水田の耕作土直下から検出された。地山面を南北1.8m、東西1.4m、

S X01

深さ20cmの隅円方形に掘り、中央に直径1.0m、底径90cmの桶状の容器を納めた遺構と考えられる。

桶状部は、1.0~1.5cm前後の灰白色粘土が巻かれたように検出され、この粘土内から木質片が検出されている。これらは、木桶が粘土に置換したものと推定される。遺物は埋土上層より寛永通宝・陶磁器片が出土している。

S X02

調査地南部の上段水田の水田盛土下面で検出した長方形の落ち込みである。東西3.5m、南北3.0m、深さ10~15cmで、断面は舟底形である。埋土は灰褐色粘性砂質土で、土師器・須恵器の細片が出土している。

S X03

調査地北部の上段水田の水田盛土下面で検出した。長辺1.1m、短辺90cm、深さ40cmの梢円形の落ち込みである。断面形は逆台形をしている。落ち込みの南側は、近代の水田造成により削平を被っている。落ち込みの底に比較的大きめの河原石を置き、その直上に磁石・陶器・硯石を納めて、上部を陶器片と3cmの大いな小円礫で埋めている。

S X04

調査地南部の上段水田の東端の水田盛土下面で検出した。当初は、長辺2.45m、短辺

S X05

1.6mの長梢円形の落ち込み状に検出された。しかし、坑底近くで円形の落ち込み2基が

重複した状態で確認され、河原石の集積を上層にもつ西側の落ち込みが、東側の円形の落ち込みを掘り込んでいることが判明した。

東側の円形の落ち込み（S X04）は直径1.5mのほぼ正円形である。ほぼ垂直に掘り込まれた落ち込みで、残存する深さは10cm前後である。西側の円形の落ち込み（S X05）も直径1.5mのほぼ正円形である。S X04と同様にはば垂直に掘りこまれた落ち込みで、残存する深さは32cmである。

いずれの落ち込みも底部は平坦である。遺物はS X05の上層部から陶磁器片が出土しているのみである。

S X06

調査地南部の下段水田で検出した南北に延びる溝状遺構である。後世の削平を被っていると考えられる。溝状遺構の北・南側では浅くなり、途切れている。残存状況の良い中央部で幅50cm、深さ27cmである。断面形はU字形である。溝状遺構の底面では径10cm前後の枕状のピットが45cm間隔で検出されている。

S X06はS B01の南東隅の柱掘形を切って掘り込まれており、近世の耕作溝の一部と考えられる。



fig. 359 S X01近景 (南から)



fig. 360 S X03検出状況 (南から)



fig. 361 S X04・05検出状況 (南から)



fig. 362 S X07検出状況 (南から)